

中世記録地名の環境語彙分析

肥後国阿蘇郡湯浦郷の「山野境注文」を素材に

An Analysis of Environmental Vocabulary
in Place Names Recorded in the Middle Ages

春田直紀

はじめに

- ①史料の性格と先行研究
- ②山野境記載の提示
- ③中世湯浦郷の空間構成
- ④境界地名の語彙分析
- ⑤まとめ——生活空間と環境認識

【論文要旨】

史料に記録された地名は今までおもに、歴史的景観を復原するための重要な手がかりとして活用されてきた。そのため、復原の鍵となる歴史地名に関心が集中する一方で、現地比定が困難な地名の活用は低調であったといわなければならない。しかし地名を、位置を示す符号としてのみ扱うのではなく、土地に対する認識の言語化ととらえ、その観点から地名の意味の成分分析を試みるならば、より多くの記録地名が有効に活用されることになろう。とりわけ、自然環境に関する地名には、住民の環境に対する認識が深く浸透していたとみなすことができる。地名を手がかりとした環境認識の分析は、住民の生活に密着した小地名（小字・通称地名）を対象に進められてきたが、記録地名であっても地域的・数量的にまとまった地名群を扱うことができれば、地名の語彙分析を通して、特定の時代における住民の環境認識や環境利用の実態を探り出す手がかりは得られるはずである。

そこで本稿では、自然的要素の地名を多く収載し、地名相互の連関も把握しやすい肥後国阿蘇郡湯浦郷の「山野境注文」を基本史料として記録地名の語彙分析を進め、客体である環境を主体である中世の人間がどのように認識し、いかなる生活空間を構築していたかという課題に迫った。その結果、①中世湯浦郷の生活空間は、高低差約400mの阿蘇外輪山上と麓集落とを縦に結ぶ「大道」とそれを相互につなぐ「横道」とが動線となって構成されていたこと、②湯浦郷の住民は、土石流や水害を繰り返す地形環境のなかで、自然災害時の危険ポイントを体系的に認知し、集落地や利用する土地の選択も行っていたことを明らかにするとともに、③自然的要素の地名においても中世と現在との懸隔は大きく、その背景にある外的な環境変動に加え、環境を認識する人間の内的な変化や、地名を整序する制度的・社会的枠組みの問題を考慮する必要があることを、最後に指摘した。

はじめに

従来進められてきた地名の歴史資料としての活用は、概ね二つのアプローチに整理することができる。ひとつは史料に記録された歴史地名（以下、記録地名と称する）を現在の地名と照らし合わせて現地比定を行い、歴史的景観を復原していく方法であり、今一つは文献史料が残らない地域でも、特定の時代の遺称であることが明確な現在地名によって復原をめざす方法である。この二つの方法によって地名による歴史研究は多くの成果を挙げてきたが、ここでは従来の方法論がもつ問題点を明らかにしておきたい。

まず前者の方法については、地理学の関戸明子氏がすでに「このような研究では、地名は位置を示す符号として扱われている場合が多く、復原の鍵となる地名以外は、その意味を考慮したものはほとんどみられない」と指摘している。文献に登場する地名の場所を確定し歴史的景観の復原図を作成すると、歴史情報は空間的に読み取ることが可能となり、文献だけでは気づかない新たな発見がもたらされる。しかし、関戸氏の指摘が正しければ、記録地名と現在地名との一致する度合いが低ければ低いほど、記録地名の史料的価値も比例して下がるという難点をこの分析法は内包していることになる。

後者の方法は、「特定の時代の遺称であることが明確な現在地名」を軸にした分析であるところに限界性もみることができ、かりに現在地名の全てがその成立年代によって編年でできれば、文献の有無に関係なく地名だけで歴史を描くことが可能となるが、社会的要素をもつ地名に比べ自然的要素をもつ地名に時代性を読み取ることには一般的に困難が予想される。山口恵一郎氏は、「地名の発生における本来の有意性に着目」して、地形語、法制語、社会語、生活語の4類型を設定したが、このなかで最も時代性があらわれる地名は、「土地制度や税制、または軍事・政治などに関連して与えられた」法制語ということになる。逆に最も時代性が読み取りにくい地名が「自然環境を端的に表現するか、または広くこれに因む」地形語であるとすれば、地名から過去の環境情報を引き出すうえでは限界を伴う分析法といわざるをえない。

ひるがえってみると、位置を示す符号として記録地名を扱ってきた前者の方法は、環境情報の読み取りという点においても課題を残すものであった。近年では、微地形（100年オーダーの地形発達）・極微地形（氾濫堆積ごとの地形発達）というレベルの精緻な地形分析が進められるようになった結果、地名が記録された時点での地形環境はかなりの精度で復原できる研究段階を迎えつつある。しかし一方で、その時代に生きた人間が、生活環境としての自然をどのように認識し、その認識のあり方が環境利用や空間構成にいかに関与したかという問題群は、地形環境復原だけでは解けない応用問題であり、他のアプローチも要請されることになる。そこで参考となるのが、小地名（小字や通称地名）を利用した環境認識の解析法である。

古田充宏氏は、地名を住民による環境認識の対象化・言語化ととらえ、地名の接尾辞を基準とした複合語の構造分析から、住民が対象をどう認識しているかを析出している。一例を挙げると、コマツオダニは「コ+マツ+オ（=尾根）+タニ」の3次複合語であり、「ここでは植物は、大きさ・かたちとその生育場所まで認識されて、タニという接尾辞と結びつき地名を構成するのである。集

团的で景観的な社会を形成する高等植物は環境認識における重要な鍵的要素であり、そのこまやかな認識のあり方には植物の山林資源としての意義と有用性をうかがうことができる」と分析している。⁽⁷⁾植物の認知と地形の認知とをつないで山林利用の場を把握する、明確で精緻な環境認識の体系がここでは見出されているのである。一方、関戸氏は、地名の接尾辞ごとに分布の特徴をとらえることで、地名の語彙と場所の性格との対応関係をおさえ、土地をみる視線の基点が複数あることや土地の分類過程、土地利用法と地名の精粗との相関性など、多くの重要な指摘を行っている。⁽⁸⁾

記録された歴史地名を対象にした研究でも近年、米家泰作氏によって空間・地形・境界の認識が問題にされているが、一つひとつの地名語彙の成分分析までは試みられていないのが現状である。⁽⁹⁾古田氏や関戸氏の研究は現在の小地名を素材にしたものだが、記録地名であっても地域的・数量的に一定のまとまった地名群を扱うことができれば、地名の語彙分析を通して、当時の住民の環境認識の体系とそれが方向づけた環境利用のあり方を解明する手がかりをえることは十分に期待できる。そこで本稿では、自然的要素の地名を多く収載し、地名相互の連関も把握しやすい肥後国阿蘇郡湯浦郷の「山野境注文」を基本史料にして記録地名の語彙分析を進め、客体である環境を主体である中世の人間がどのように認識し、いかなる生活空間を構築していたかという課題に迫っていきたい。

①……………史料の性格と先行研究

1 「山野境注文」の史料的性格

本論に入る前に、分析に用いる史料の性格について述べておきたい。基本史料とするのは、応永16(1409)年9月日、肥後国湯浦郷坪付山野境等注文写〔肥後阿蘇家文書〕⁽¹⁰⁾である。この文書は、湯浦郷を含む阿蘇社領西郷の支配を担当した阿蘇社権大宮司の宇治能里が、在地支配に関わる注文(調査報告書)を集成したもので、複数の内容から構成されている。そのうち約8割の分量をしめるのが「注進肥後国阿蘇之社領之内湯浦之郷廿町之内田地坪付并山野之境村々付テ注置者也」で始まる注文(「坪付・山野境注文」と略称する)であり、湯浦郷に関しては最も多くの地名情報を収載している史料として注目できる。湯浦郷内には24か村が設定されていたが、「坪付・山野境注文」では一村ごとに田地の坪付と山野境が書き上げられている(山野をもたない村には山野境記載はない)。坪付(以下、「田地坪付」と称する)に記された殆どの田畠には地名が付されており、地名の語彙を分析すると中世における耕地の土地条件や水利・農法などに迫ることができるが、その本格的な検討は後考を期し、本稿では山野境に関する記事に絞って考察を加えてみることにしたい(以下、山野境記載の部分だけを指して「山野境注文」と称する)。

湯浦郷の山野には村々分以外にも「としの」、「かたほこ」、「おり戸ひら」、「しもつた」、「はたべ」があり、これらは公方(阿蘇社大宮司)分の狩蔵や秣場として権大宮司の管理下におかれた。「山野境注文」では村々分と公方分すべての山野境界線を、例えば次のように詳細に記している。

みなミハほりきり大道かたひら山のせをかきりきたのひら、きたハミつのもとより山の神の谷をかきり居屋敷まで、(以上は、小菌村山野分)

田地坪付が記す地名は一所ごとに「点」として現れるのに対して、山野境の記載は山野の地名を

「線」で結ぶものであり、山野領域の空間把握がより直截に表現された史料ということができよう。もっとも現在伝わる「山野境注文」自体は写であり、書写の対象となった原文書の作成時点やその前提となった土地調査の実態を直接示す手がかりもない。そのため、注文の記載内容がどの時点での誰の空間認識を表現したものであるか、というアポリアはつきまとうが、いくつかの判断材料は挙げるができる。

- 1) 山野境は、小藪村で例示すれば、道、山の部分地形、水源地、谷、屋敷などのポイントをおさえる形できわめて具体的に表現されている。この点からすれば、山野と日常的に接する居住者の空間認識を前提とした境の確定で、単に領主が上から設定した境界の表示ではなかったと考えられる⁽¹¹⁾。
- 2) 湯浦郷内の支配単位は、至徳年間まで遡ると「け」(至徳2(1385)年8月7日、阿蘇社領郷々注文⁽¹²⁾)や「けん」(至徳4年8月日、阿蘇郷村并宮地四面内天役注文⁽¹³⁾)であり、「村」が郷内の支配単位となるのはそれ以降、つまり応永16(1409)年から遡るところ約20年の間ということになる。「山野境注文」の原文書作成とその前提となった調査はこの期間に行われたものと推定できる。

以上の2点から、本稿では「山野境注文」を14世紀末ないし15世紀初頭における湯浦郷居住者の空間認識を表現した史料とみなし、その分析を通して「はじめに」で掲げた課題に取り組んでいくことにしたい。

2 先行研究の論点と課題

次に「山野境注文」を用いた先行研究の論点を整理し、本稿の関心に沿った形で残された課題を提示しておこう。初めてこの史料を本格的に検討した杉本尚雄氏は、何れの一所にも山野が付属している点に湯浦郷の特色を見出し、その理由を次のように説明している。

一つには、湯浦郷が、阿蘇谷の北麓外輪山の内側の湾入部半円形に包まれた地域であるために、播鉢形の底部に村落があって、上方斜面に山野が扇形に拡がるという好都合の地形に恵まれているためであろう。一々の屋敷及び田地が、後背地に山林原野を持ち易いのである。しかもその山野は概ね、「山野、居屋敷よりひとのほり」と言われる様に、居屋敷に接近して設けられており、山野が薪炭・下草利用に便利な如く分割付属せしめられている。それは、居屋敷・山野・田地の一体的統一関係の模型といえよう⁽¹⁴⁾。

ただし、先にみたように湯浦郷には村々分の山野を割く形で公方分の狩蔵や秣場も設定されていた。これに関し杉本氏は、公方料所の山野設定は統一的な農業経営組織に一種の不完全性を与えたと評価している。

この杉本説を、現地調査にもとづく山野境の復原作業を通して批判的に検証したのが阿蘇品保夫氏である。村々分山野については現地比定をもとに、すべての村々の背後に山野があるとは限らず、山野のない村、はなれた地に山野のある村、山を二つ持ったり、広大な範囲を有したりする場合など、多様なケースがあることを示した。こうした例外的事象のなかに阿蘇品氏は、新たに親村から分出した村や在地領主の知行分に対する荘園領主側の割付け、調整のあとをみている。一方、山野

が居屋敷の背後の斜面に伸びていたとする理解に対しては、平地、または高所まで達していないものもあり、領主側の機械的割付けが一方的に行われたのではないことを指摘。さらに、公方分山野の位置も比定し、地形と用益との対応関係にまで言及している⁽¹⁵⁾。湯浦郷故地で初めて本格的な現地調査を行い、山野境の復原成果をもとに史料解釈を試みた阿蘇品氏の研究により、それまで理念的に捉えられてきた村と山野との関係が、より政治的かつ動態的に把握されるようになった点は高く評価できるが、残された課題も少なくない。本稿の主題との関連から4点を指摘しておく。

- 1) 村々分に関していうと、考察の中心が例外的な事例に向けられ、居屋敷、山野、耕地の一体的な関係の具体相に踏み込んだ考察を行っていない⁽¹⁶⁾。
- 2) 外輪山上の「はたべ」と内壁上部の岩壁（急崖）部分に対する評価に疑問を感じる。阿蘇品氏は「はたべ」を「公方分と云っても無主の荒野同様であり、猪や鹿を得た場合、頭や皮を納めることを定めている位で、領民の立入等に何ら禁制を加える必要を認められていないものと云えよう」と述べ、利用度の低い場所と位置づけている。また、「山野境は外輪山上を通っている『はたべ大道』までということに、別の史料では定めているが、これはあまり意味がなく、『湯浦郷坪付』の如く、内壁上部の岩壁や、岩壁附近までであったであろう」と推測しているが、後で検討するように、「はたべ大道」と里から「はたべ」へと通じる谷道とは湯浦郷の主要幹線であり、岩壁地形に関する語彙が豊富な点から考えても、阿蘇品氏の高地に対する評価は再考の余地がある。
- 3) 阿蘇品氏が作成した「阿蘇湯浦郷山野境推定図」は概念図で、地形図上に示されたものではないので、山野境推定線の正確な位置と、現地比定の根拠とを確認することができない。その点を考慮して、本稿ではあらためて山野境に記された地名の比定地を地形図上に記し（図2）、空間構成について考察を加えることにしたい。
- 4) 阿蘇品論文では地形の分析から、各山野領域の立地条件についても言及しているが、その立地環境を中世の人間がどのように捉え、自己の生活空間を形づくっていたかという問題までは扱っていない。

以上の疑問点と課題を念頭におきながら、いよいよ本論の検討へと入っていき⁽¹⁹⁾たい。

②……………山野境記載の提示

まず最初に、分析の基礎データとなる「山野境注文」の記載内容をすべて提示しておく。

【凡例】

- * 1. 冒頭の番号を付した地名のうち、波線で囲んだものが公方分、囲みがないものは村名を指す。
- * 2. 記載順は、原則として湯浦郷の南西から南東にかけて時計回りに配列し、最後に外輪山上の「はたへのひへかくら」を載せた。
- * 3. 文章の表記は原文のままである。
- * 4. 山野境の文章は、方位ごとに分けて掲載した。
- * 5. 地名の複合語単位に下線を引き、複合語を構成する主要な接尾辞に網掛けをした。
- * 6. 「さと」という語には囲みをつけた。この語以下の文章は、里境の表記となる。

【山野境記載全文】

1 おり戸ひら

- 〈東〉 こめの山大道をひわのたうのつしより、く、牟田のせりのくちをかき
〈北〉 はたへのよこ大道をかき、さど ハク、むたのうへのよこみちをかき
〈西〉 やこ大道の七、まかりのきたの谷の水おてよりうふのもとまでかき

2 小嶋方の知行分ミくほすきのゑら

- うつけ川のくちよりハにの石の下のみちかき、うへハこめの山大道をせりのくちまで
〈北〉 くく牟田のうへ おりとひらのすのよこみちかき
〈西〉 狩尾のおにのきた おさこの大道かき
〈南〉 大河をかき
〈東〉 すきのゑらの河をかき、ゆのたうのすのハゆの池のなかれをかき
た、しの内く、牟田三分一、はうしやうゑ御まつりについて、狩尾のうちにわけつくる

3 しもつた

- 〈北〉 くわ原河のわたせくちより、ふちかいらをつちとりのもとよりかたほこのしたのみちかき
〈南〉 ゆのいけのなかれを大川かき
〈東〉 くわ原河のわたせくちより大河のはきあひまて

4 かたほこ

- 〈東西〉 はたへハほりきり大道よりさかり、山のめんはちの尾をくたり、すにハふるつつら内のも
とをくわ原河のわたせにみあてへさかり、山若 (カ) すの道かき、瀬尾 ハめうしう
のほり戸よりひわのたうのきたむきのひら たこ山のきたむきを、わにの石のもとよりう
つけ河のよこ道をかき、く、牟田のせりのくち こめの山大道をかき

5 こその、村

- 〈南〉 ほりきり大道 かたひら山のせをかききたのひら
〈北〉 ミつのもとより山の神の谷をかき居屋敷まで

6 中藪

- 〈南〉 山の神の谷をくたり、しもは三十丁河原をかき
〈北〉 かうこ石よりさどまで、一とをりはのさかひの谷をかき

7 馬場之村

- 〈南〉 かうこ石の谷をかき居屋敷まで
〈北〉 おさこのおもうちより、さどはよこみちのいしほとけ きやうしちはたけのたつミのすミを
かき

8 野付之村

- 〈南〉 をさこのおもう地よりきやうしち壱之たつミのすミまて
〈北〉 にれの木谷の大道をかき、さど ハすきつかよりいぬひのかたの鳥聞石のもとの谷をくたり、
いちか窟のひつしさるのすさきのかもおい壱まてかき

9 中尾

- 〈南〉 にれの木谷より、さど ハよこみち 鳥聞石まで

〈北〉へつたうかうその水おてをかきり、さどハ野つきのうへのしりなし尾をかきる

10 内田之村

〈南〉木はち大道のへつたうかうその水おてより、さどハ野付之うへのしりなし尾より、鳥聞石のもとまで、

〈北〉かけはし山の水おての谷をくたり、うとミ石のもとをなかはやふの谷を鳥聞石まで

11 となしの村

〈南〉城之尾よりうとミ石の谷をくたり、なかはやふを鳥聞石のもとをくたり、こむたのくちのしりなし尾のみつはきあひをかきる

〈北〉おいをろのをもう地をくたり、山の神の谷をくたり、一の宮のうへのまゆミの木のもとミヤところをかきる

12 城之村

〈西〉おいをろのおもう地を山の神の谷をくたり、さどハまゆミの木たち

〈東〉くまの戸よりくたり、さどハいれつつい 鳥聞石の谷よりふたまたやふのしりなし尾をかき
るはれつゝいのうへ 西つらたか

13 今山

〈西〉くまの戸より鳥聞石の谷をくたり、みつはきあひをかきる

〈東〉しろ石か尾をくたり、さどハつちはしをかきり

14 宮の尾之村

〈西〉しろいしか尾よりつちはしのもとをかきる

〈東〉みつかとのなかの山よりひられいしの谷をくたり、よこいしの西の谷をかきる

15 室蘭

〈西〉みつかとのなかの山より、ひられ石の谷をくたり、よこ石の西の谷をかきる

〈東〉山はきののほりどよりこおとこおうの谷をくたり、おうかやの木のもとを二郎九郎やふの谷
をくたり、おんはちの西の谷をよこ石のひかしの谷をくたり、井手のおもてまでかきる、ひ
かしつらたか

16 上恵良

〈西〉山はきののほりどよりこおとこおのたの谷をくたり、おんはちのにしの谷をくたり、さどハ
よこ石の井手のおもてをかきる

〈東〉くわの木のとのかきのもとをひへ田のおうつきの木のもとをくたり、さどハたいらか原
はきあひをかきる

17 中嶋

〈西〉くわの木 とのかきのもとよりひへたの谷の大つきの木のもとをくたり、さどハたいらか原
はきあひをかきる

〈東〉大はたの山の神のもとより、さどハしくれとの山の神の谷をかきる

18 杉蘭

〈西〉おはたの山の神の谷をしくれとの山の神のもとまで

〈東〉たうせうはたののほり戸よりくたり、ふる山の神のはきあひをかきる

19 南之村

〈西〉たうせうはたののほり^とをくたり、^{ざと}いふる山の神のはきあひより、南ハせきしやうかや^ふをかきり、したかのおくひのさこたち

〈東〉おひら山のにし^の山のはのせをくたり、南ハしたかのせきしやうかや^ふに見あてへみちかきり

20 北之村

〈西〉おひら山の西の山のはより、みなミはしたかのならの木^の尾を、三丈田のくち^{まて}

〈東〉おひら山の大水おてをあさ^の畠の谷をくたり、下ハせきしやうかや^ふの河をかきり、かうかのわた^{まて}

21 すたれの村

〈西〉おひら山の大水おての谷より、あさ^の畠の谷をかうちのいした^ミをかきる

〈東〉なかくらの大道をかきり、上ハはたへの年の神のもとをかきり、下ハなかくらのく^ミかわちより、長山の谷をかうちのいした^ミのもとをかきる

たたし、はたへの一けんきようよりひかし^ハひかし^原の山野にわけつくる

22 としの、かくら

〈北〉はたへの年の神のもとより、長蔵大道のく^ミか^ハち 長山の谷をかきる

〈西〉せきしやうかや^ふを、かうかのわた^瀬をふるてんしのもと^のよこ^ミちをかきる

〈東〉年の神のもとよりはたへ大道をかきり、こくさうつりのくちく^ミのもと^の瀬をかきり、たうめか^ハは^なの瀬をくたり、^{ざと}はくらかた^尾をくたり、しもは^櫛の木^の尾を宮原のよこ^ミちをかきり

23 中嶋之村二付テ野山

〈北〉篠山のくらかた^尾をよりならの木^の尾をくたり、^里はよこ^ミちをかきる

〈東〉篠山の大^{たう}けをかきる

〈南〉篠山のあくた^神のもとより、^里はつ、内の^尾の瀬を北の^{ひら} よこ道かきり

24 宮原

す、山の大^{たう}けのあくた^神のもとよりおさとの牛か^ミのもとに見あてへゆ^やまのす^のはきあひのいりむた^たのおさきをかきり、みなミの^{ひら}をきつね^つかのす^の牟田^きわ^まて

25 はたへのひへかくら

篠山のたうめか^ハは^なより、としの、うちのくさうつりよりはしめて^まと^石まて、はたへのひへかくらハ中司付テ預申ス、ひ^ミかくらにれう仕候する者ハ、猪をとり候する者ハか^ふを出へし、鹿を取候する者ハ皮を出へし

③……………中世湯浦郷の空間構成

火山性の巨大な凹地形として知られる阿蘇カルデラ。その北半にあたる阿蘇谷のカルデラ縁には半月形に入り込んだ地形がいくつもみられるが、そのなかでも最大の湾入部に中世の湯浦郷は位置



図1 中世湯浦郷の位置図

(ベースマップは、国土地理院 5 万分 1 地形図「阿蘇山」(1989 年発行)と「宮原」(1992 年発行)を用いた。)

した(図1)。湯浦郷の山野は、半月形の平地を馬蹄形状にとりかこむカルデラ内壁斜面と外輪山上とに広がり、耕地として利用されていた平地と斜面との接点に集落が分布していたと考えられるが、室町時代における湯浦郷の空間構成を「山野境注文」をもとに、より具体的に明らかにしていくことにしよう。⁽²¹⁾

1 東西南北の境界比定

まず、湯浦郷の領域の外枠を確認しておきたい。西の境界線は、1 [おり戸ひら]⁽²²⁾ 西境の「やこ大道の七、まかりのきたの谷の水おてよりうふのもとまてかきる」に引くことができる。「やこ大道」は阿蘇外輪山西部にある矢護山（熊本県菊池郡大津町）へと続く幹線道であろう。「うふのもと」に類似する地名に産ノ小屋（熊本県阿蘇郡阿蘇町大字狩尾）があるので、「やこ大道の七、まかり」は狩尾の集落と外輪山上とを結ぶカリオザカ（狩尾坂）、「きたの谷の水おて」はカリオザカの北東部にある崖錘の湧水地を指すと考えられる。当時、湯浦郷の西隣には狩尾村が存在したが、狩尾村の後背地斜面までが湯浦郷の山野として設定されていたことになる。一方、阿蘇谷平地部において西端に位置したのは「くぐ牟田」⁽²³⁾であった。2の記載によれば「くぐ牟田」は、「おり戸ひら」の南、大河（現、黒川）までの範囲で、阿蘇町大字三久保、折戸地区内の黒川右岸低地に比定できる。

次に、湯浦郷の東の境界線は、22 [としの、かくら]、23 [中嶋之村ニ付テ野山]、24 [宮原]、この3者の東境をつなげたラインということになろう。すなわち、「はたべ大道」と近接する「こくさうつりのくちくゑのものと瀬」と「たうめかはなの瀬」と「す、（篠）山の大たうけのあくた神」（「ゆやま」の上部）とを結ぶ線で、現在地は、菊池阿蘇スカイラインと国道212号線が交差する地点付近から遠見ヶ鼻（大観峰）へと南下し、遠見ヶ鼻から南西方向に尾根筋を下って湯山（阿蘇町大字小里）にいたるルートに比定できる。

湯浦郷の北の境界は、「山野境注文」では定められていない。25 [はたへのひへかくら]によると、遠見ヶ鼻からの石村との境界（「おり戸ひら」の西境を北に延長した線か）までが湯浦郷内の外輪山上部分であったが、この範囲は現在では複数の地区の牧場・原野が分布する通称端辺原野に



写真 湯浦郷故地の景観

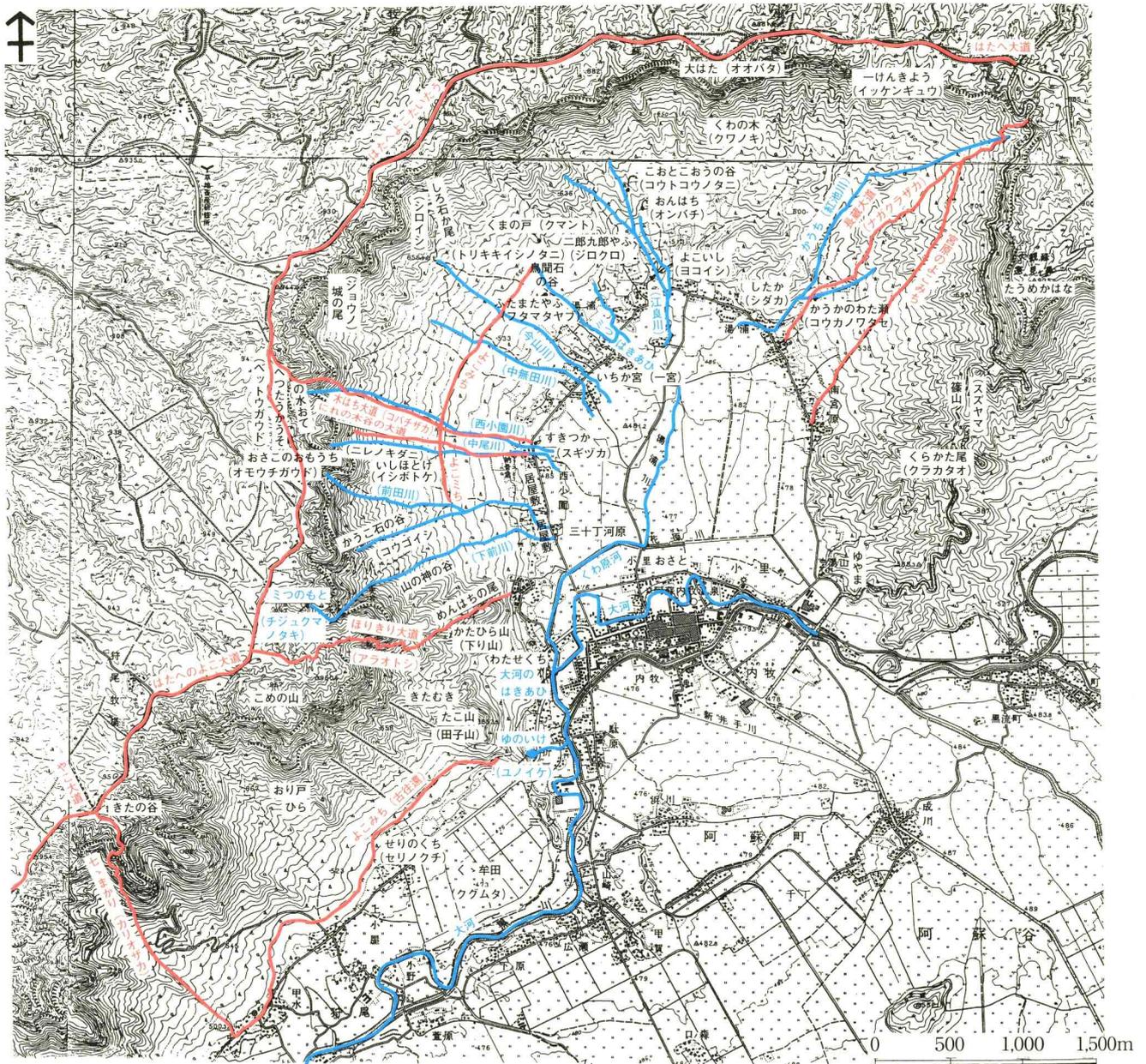


図2 「山野境注文」記載地名比定図

(ゴシック体の漢字・ひらがな表記は「山野境注文」記載の地名、カッコ内のカタカナまたは漢字表記は現在の通称地名を示す。なお、道の経路と名称は赤で、河川の流路と名称などは青で、その他の地名は黒で表記した。ベースマップは、国土地理院2万5千分1地形図「鞍岳」(1978年発行)・同「坊中」・同「満願寺」(ともに1976年発行)・同「立門」(1979年発行)を使用。圍場整備前の景観を示す。)

相当する。25の文章からは「はたべ」が公方分の狩蔵であるとともに、地元住民にも開かれた狩猟地であったことがわかるが、公私共利の場という性格もあって、北接する小国郷との境界は利用の実態に応じて伸縮するゾーンとして明確な線引きはされなかったと推測される。

一方、湯浦郷の南の境界線は、南西部の「くぐ牟田」は黒川であったが、中央部の南側は小里郷との間に引かなければいけない。「山野境注文」にこの部分の記載はなく、「田地坪付」の詳細な検討の結果をまつ必要があるが、南宮原・湯浦・西湯浦・西小園（以上、阿蘇町の大字。この4大字の範囲は全て中世の湯浦郷域に含まれる）の谷水を集水して黒川へと流入する花原川の旧河道が両郷の境であった可能性が高い。

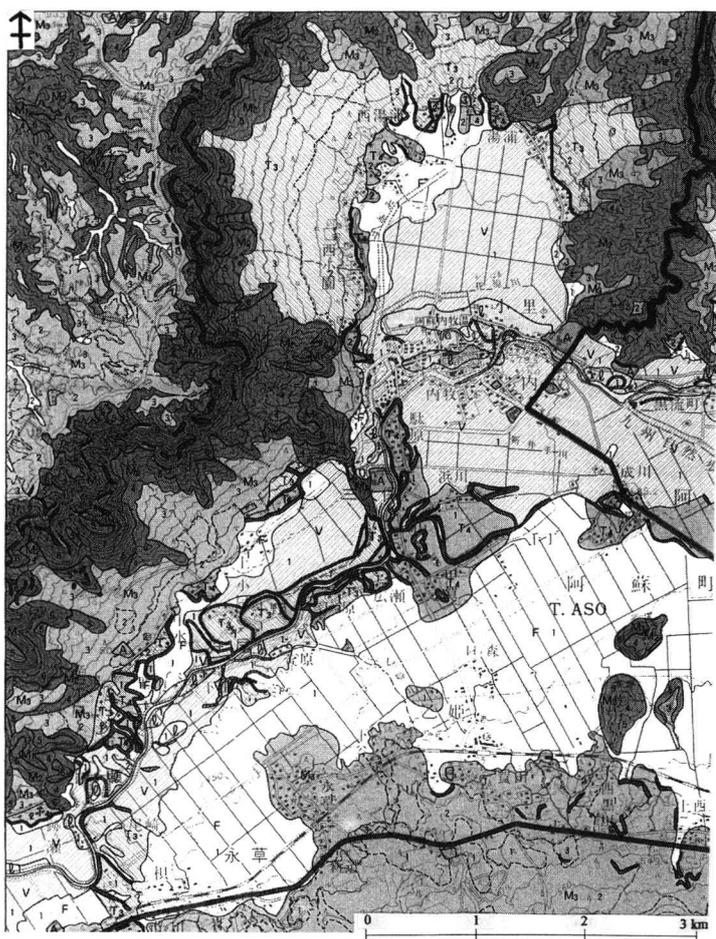
2 山上から低地への空間配置

それでは、湯浦郷の空間を「山野境注文」はどのように把握しているのだろうか。注文では山野の境界線を原則として、カルデラ内壁の高所から麓の里へといたるルートで書き記している。湯浦郷内において外輪山上と麓の平地との比高差は400m前後あるが、1[おり戸ひら]と2[小嶋方の知行分]の「くぐ牟田」を素材にして空間把握のパターンを抽出すると、山上から【はたべー戸ーひらー牟田】という配置が浮かび上がる。

「はたべ」は現在でも使用する外輪山上を指す広域名称で、今は「端辺」の字が宛てられている。「はたべ」には「よこ大道」が通り、この道が「おり戸ひら」の北限であった。「戸」という語は注文に単独では出てこないが、「おり戸」と「のほり戸」という対称をなす二種類の複合語の接尾辞としてみるができる。「おり戸」が「ひら」を接続させる語として現れるのに対して、「のほり戸」では「めうしうのほり戸」(4〈東西〉)や、「たうせうはたのほり戸」(18〈東〉)のように、ある地点から指示された語として「戸」が用いられている。この差は「戸」が、「おりる」起点か「のほる」対象かの違いによるものであろう。では一体、「戸」とは何か。そこで注目されるのが、現在内壁斜面を指す全体呼称として用いられている「戸下」という表現である。「戸下」は「岩下」とも呼ばれるから、「戸」は「岩」を指すと考えてよい。たしかにカルデラ壁の上部には岩場が存在する。これは阿蘇火砕流堆積物によって形成された急崖で、「おり戸ひら」比定地の上部では40度前後の急傾斜に溶結凝灰岩が鉛直に維持されている(図3・図4)。湯浦郷の故地ではこの岩場がカルデラ壁の上端に連なっており、下から見上げると戸がいくつも立っているように見える。そのさまを形容して「戸」と呼ぶようになったと推測したい。

そこで「おり戸」と「のほり戸」という表現にたちかえれば、「山野境注文」では内壁上端の岩場を重要な空間指標ととらえ、それとの垂直的な関係で下に位置するものを把握するという認識の型をもっていたことになろう。この解釈に立てば「おり戸ひら」は、戸(岩場)から下りた地点の「ひら」となる。「ひら」は山の傾斜地を示す語として地元で今でも使われている表現である。「おり戸ひら」比定地では、岩場から下りた所が20度前後の一般斜面で、その下に10度前後の緩斜面が続くが(図3)、この傾斜地全体を指す地域呼称が「おり戸ひら」だったのである。

前述したように、「おり戸ひら」の南は「くぐ牟田」であったが、両者の境界は「くぐ牟田のうへおりとひらのすそのよこみちかきり」(2〈北〉)と記されている。ここで境界線として出てくる



凡例 Legend

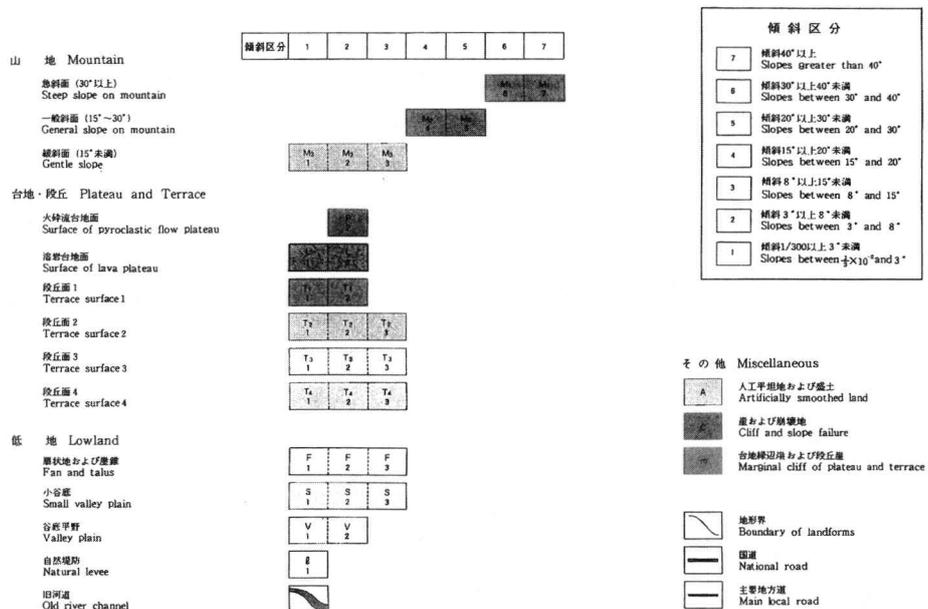
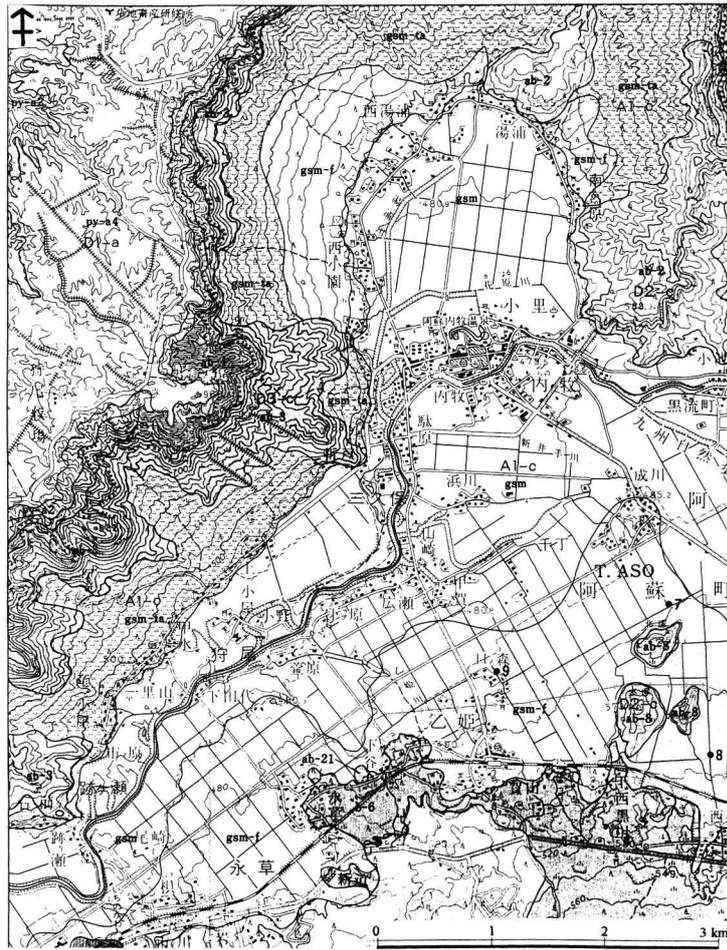


図3 湯浦郷故地の地形分類図

(ベースマップは、『土地分類基本調査 阿蘇山・竹田』5万分の1(熊本県, 1995年発行)所収「地形分類図」(調査者高橋俊正)を使用。)



凡例 LEGEND

| | | | |
|---|---|---|--|
| <p>未固結堆積物 Unconsolidated deposits</p> | <p>gsm Gravel, sand, mud (カルデラ埋積層) Gravel, sand, mud (Caldera-fill deposits)</p> <p>gsm-t Gravel, sand, mud (扇状地堆積物) Gravel, sand, mud (Talus)</p> <p>gsm-f Gravel, sand, mud (扇状地堆積物) Gravel, sand, mud (Fan deposits)</p> | <p>沖積世 Alluvium</p> <p>時代 Age</p> <p>沖積世 Diluvium</p> | <p>A 沖積世 Alluvium</p> <p>D 沖積世 Diluvium</p> <p>Tn 新第三紀 Neogene</p> <p>M 中生代 Mesozoic</p> |
| <p>火山性岩石 Volcanic rocks</p> | <p>ab-21 輝石かんらん石玄武岩溶岩・火砕岩 (安山岩質岩石-21) (中島火山古期) Pyroxene olivine andesite lava and pyroclastics (Andesitic rocks-21) (Old Naka-dake)</p> <p>b-8 輝石かんらん石玄武岩溶岩・スコリア丘 (玄武岩質岩石-8) (住生色火山) Pyroxene olivine basalt lava and scoria cone (Basaltic rocks-8) (Ojo-dake volcano)</p> <p>ab-8 輝石角閃石アイサイト溶岩 (一部水中溶岩) (安山岩質岩石-8) (本郷火山) Pyroxene hornblende dacite lava (partly subaqueous) (Andesitic rocks-8) (Hontsuka volcano)</p> <p>pp-44 軽石・凝灰角礫岩・溶結凝灰岩 (火山砕屑物-A4) (Aso-4火砕流堆積物) Pumice, tuffbreccia, welded tuff (Pyroclastics-A4) (Aso-4 pyroclastic flow deposits)</p> <p>pp-42 スコリア・凝灰角礫岩・溶結凝灰岩 (火山砕屑物-A2) (Aso-2火砕流堆積物) Scoria, tuff breccia, welded tuff (Pyroclastics-A1) (Aso-2 pyroclastic flow deposits)</p> <p>角閃石安山岩溶岩 (安山岩質岩石-4) (先阿蘇火山岩類) Hornblende andesite lava (Andesitic rocks-4) (Pre-Aso volcanic rocks)</p> <p>ab-3 輝石安山岩溶岩 (安山岩質岩石-3) (先阿蘇火山岩類) Pyroxene andesite lava (Andesitic rocks-3) (Pre-Aso volcanic rocks)</p> <p>ab-2 輝石角閃石アイサイト火砕岩 (安山岩質岩石-2) (先阿蘇火山岩類) Pyroxene hornblende dacite pyroclastics (Andesitic rocks-2) (Pre-Aso volcanic rocks)</p> | <p>沖積世 Diluvium</p> <p>沖積世 Alluvium</p> <p>沖積世 Diluvium</p> | <p>岩体のかたさ Hardness of rock masses</p> <p>1 軟 (弾性波速度1.5m/sec未満) Soft (Velocity of elastic wave, less than 1.5m/sec)</p> <p>2 中 (弾性波速度1.5m~3.0m/sec) Medium (Velocity of elastic wave, 1.5~3.0m/sec)</p> <p>3 硬 (弾性波速度3.0m/sec以上) Hard (Velocity of elastic wave, more than 3.0m/sec)</p> <p>岩片のかたさ Hardness of rock specimens</p> <p>a 軟 (耐圧強度100kg/cm²未満) Soft (Compressive strength, less than 100kg/cm²)</p> <p>b 中 (耐圧強度100~400kg/cm²) Medium (Compressive strength, 100~400kg/cm²)</p> <p>c 硬 (耐圧強度400kg/cm²以上) Hard (Compressive strength, more than 400kg/cm²)</p> |
| | <p>深成岩 Pulvonic rocks</p> <p>岩脈 Dike</p> | <p>花崗岩類 (花崗岩質岩石) Granitic rocks</p> <p>P: 輝石安山岩 Pyroxene andesite</p> <p>H: 角閃石安山岩 Hornblende andesite</p> <p>火口 Crater</p> <p>新層 fault</p> <p>不整合 Unconformity</p> <p>岩石の種類境界 Boundary of rocks</p> <p>柱状断面図の位置及び番号 *1</p> | <p>白亜紀 Cretaceous</p> |

図4 湯浦郷故地の表層地質図

(ベースマップは、『土地分類基本調査 阿蘇山・竹田』5万分の1(熊本県, 1995年発行)所収「表層地形図」(調査者渡辺一徳・藤本雅太郎)を使用。)

「おり戸ひら」の裾の横道はフルオウカン（古往還）に比定できる⁽²⁵⁾。この道は文字通り山裾に沿って横に進む道であり、それゆえ景観の分界線としての機能も果たしたと考えられる。ところで、1「おり戸ひら」の東の境の南限は「くゝ牟田のせりのくち」と記されている。これは「くぐ牟田」側からみた分界の表現だったのではないだろうか。通称地名クグムタの北側に現在でもセリノクチ（芹の口）という地名があるが、両者の関係については、折戸地区の話者から次の二つの重要な指摘をうけた⁽²⁶⁾。

- 1) 芹は井手（用排兼用水路）の周辺にだけ生えて、山の谷には生えない。したがって、セリノクチとは、芹が低地から繁殖して上に上がる限界の口を指すのではないか。
- 2) セリノクチにはコメヤマダニから雨水が集まってくるが、この水はクグムタ北側の横道に沿った横井手に入り、そこからクグムタの各井手（南北に20本ほどあり）に水がまわって水田へと水が供給されていた。クグムタに20本もの井手がつけられたのは、この土地一帯に日焼けしやすい湿田が分布しており、水不足を解消するため。

春の七草の筆頭である芹は、水湿地に生える多年草である。「せりのくち」が湿性植物である芹の生態限界点であるがゆえに、山地と低湿地の境界指標として用いられた可能性は高い。2)の指摘では、セリノクチは湿田地帯であるクグムタへの用水供給地としても重要な地点とされるが、クグムタが全面的に開田されたのは明治時代以降⁽²⁷⁾で、中世の「くぐ牟田」はまさにクグというカヤツリ草科の水草が密生する沼沢地であったと考えられる。阿蘇社がこの地で着目したのもクグそのものであったようで、ここのクグが「阿蘇大明神放生会神事ノ用」に古来用いられてきたと、江戸時代の地誌「肥後国誌」は記している⁽²⁸⁾。

ムタは、現在この地域では、水はけが悪く、ぬかるんだ湿地で、牛耕ができない湿田を指す地名として用いられることが多いが、『地名用語語源辞典』は「ムタは『牟田』などの用字形で九州一円に卓越分布する。この場合『田』は『水田』、『田地』の意ではないことに要注意。柳田国男はこの用語について、『地面』の意の古語ミザの分化かとする。あるいはヌ（沼）・タ（処）が元か」と解説している⁽²⁹⁾。応永16年の「田地坪付」で108所の田地のうちムタを含む地名をもつものはわずか1例で、その名称が「むた田」であることをあわせ考えると、当時「牟田」は湿地・沼地の意味で使用されていたと推測される。

以上、「おり戸ひら」とその南の「くぐ牟田」を対象にして、垂直に配置された空間の構成を【はたべー戸ーひらー牟田】という地形に応じた区分で把握し、これら景観の分界指標として横断する道や植生の分布限界点がい用いられていたことが明らかとなった。もっとも、湯浦郷において山麓が低湿地と接する地区は「くぐ牟田」を抱える折戸のほか、西小園の南部と南宮原の南部に限られており、それ以外の範囲では牟田を扇状地に置き換える必要がある。また、「山野境注文」が記す地形分類や分界指標にはもとより多様な内容が盛り込まれており、そこから環境に関する様々な情報を引き出すこともできるが、その本格的な作業は④に譲り、次に湯浦郷の空間構成を考えるうえでもうひとつの重要な側面である循環系—湯浦郷の内外をつなぐ交通網—について見ておくことにしよう。

3 縦につなぐ道・横につなぐ道

道は、様々な土地と土地とがそれぞれの目的で結びついていたことを示す証であり、空間や環境利用のあり方を知る手がかりを与えてくれる。この観点から「山野境注文」に出てくる主要な道を整理すると、麓の里と外輪山上とを縦につなぐ道と、縦の道を相互に横につなぐ道とに二分することができる。

(1) 縦につなぐ道

400 m前後の高低差を上り下りするときに使われていた道を、南西部から時計回りに挙げていく。

a. やこ大道の七、まかり 1 〈西〉

前述したとおり「やこ大道」は、阿蘇外輪山の西部、現在の石牧場の北西に位置する矢護山へと続く幹線道であったと考えられる。「大道」は、注文では接頭語がつかない「道」や後で検討する「横道」とは区別して使われている表記で、主要幹線を意味するものであろう。「七、まかり」はカリオザカ(狩尾坂)の上手の岩場を通る地点のジグザグ道を指した表現とみられる。以上のことから、狩尾村の集落から谷道を上り、岩場を通過して「はたべ」へといたるルートで、さらに矢護山方面にも通じる道であったと推定しておきたい。

b. ほりきり大道 4 〈東西〉, 5 〈南〉

「はたべ」からは「ほりきり大道」より下がり、「山のめんはちの尾」を下る経路もあった。「ほりきり大道」に類似する通称地名は現在伝わっていないが、「めんはち」(女蜂)が祀られていたのは阿蘇町大字西小園の下り山と伝えられているので、⁽³⁰⁾「ほりきり大道」は通称地名のアラオトシ(荒落)、「山のめんはちの尾」は下り山の尾根に比定したい。折戸地区の話者によれば、アラオトシは下り山と田子山との間の谷から端辺に上る道で、上の方は急傾斜となっており、短時間で上れるがきつい坂であったという。

c. にれの木谷の大道 8 〈北〉

「にれの木谷」は通称地名ニレノキダニに比定できる。ニレノキダニは西小園の北部を流れる中尾川沿いの谷で、オモウチガウドと呼ばれるカルデラ壁上部の二段重ねになった岩場(急崖)に水源をもつ。⁽³¹⁾「にれの木谷の大道」が「はたべ」へと通じていた確証はないが、この道を境とする野付、中尾の両村とも別の史料では山野が「はたへ」の横大道まで達していると記され、⁽³²⁾「大道」でもあることから、山頂の「はたべ」に通じる谷道であった可能性も考えられる。

d. 木はち大道 10 〈南〉

オモウチガウドの一つ北側で同様の地形のベツウガウドの水源地の横には、「木はち大道」という道が通っていた。そのことは「木はち大道のへつたうかうその水おて」という文章が表現している。水源地上りできれば山頂である。この道は西小園の集落から西小園川沿いを上り、ベツウガウドの北側を越えて山頂へと達するコバチザカに比定できる。採草・放牧のために集落と端辺原野を往復していた時代、コバチ坂は傾斜が急なために牛馬は上ることができず、人のみが使う徒歩道であったという。⁽³³⁾

e. 長蔵大道 21 〈東〉, 22 〈北〉

「はたへの年の神のもとより、長蔵大道のくみかハチ長山谷をかきる」とあるように、長蔵大道も「はたべ」に通じる道であった。長蔵といえば、湯浦集落と端辺をつなぐ牧道として使われていたナガラザカが知られている⁽³⁴⁾が、「山野境注文」にみえる「長蔵大道」は湯浦集落へと流れる最も主要な谷川である紅池川（コウチガワ）沿いを通っていたと考えられる。「長蔵大道」と紅池川の接点を窺わず記載の一つが「長蔵大道のくみかハチ」（22〈北〉）である。湯浦でクミカワチという表現は伝わっていないが、湯浦地区の話者によれば牛馬が紅池川を通過する渡瀬をクミデと呼んだという。このクミデでは牛が川を渡るために石を組んで浅瀬をつくったという話も聞くことができたが、「かうちのいしたゝミ」（21〈西〉〈東〉）に「紅池の石畳」という字を宛てると、紅池川を渡るためにつくられた石畳と解釈することもできるか。いずれにせよ、比較的緩斜面が高所まで続き、上端の岩場も途切れた経路に比定できる長蔵大道は牛馬も上りやすい道で、谷道を通るための整備も進んだ幹線道であったとみることができる。

f. 宮原のよこみち 22〈東〉, 23〈北〉〈南〉

図5に掲げた、宝暦3（1753）年の「内牧手永絵図」（写真）によると、江戸時代の長倉坂は、湯山から山裾を通って宮原村（現、南宮原）の集落にいたり、そこから山の傾斜面を北東に上って紅池川の上流へと向かう経路で描かれている。この経路は、23〔中嶋之村ニ付テ野山〕南境の「北のひらよこ道」と、同北境の里の「よこみち」と、22〔としのゝかくら〕東境の「宮原のよこみち」とをつないだ道と、ほぼ一致する。つまり、この3つの「よこみち」は一つながりの「宮原のよこみち」であり、最終的には長蔵大道と合流して頂上へと達する道であったと理解できる。麓と山上の間をいわば垂直方向に進むa～eと異なり、斜めに進むことで、谷筋の麓以外からも山上へとアクセスできる道としての機能を果たしたといえよう。

(2) 横につなぐ道

以上の検討から明らかなように、山の麓に位置した湯浦郷の里から外輪山上にいたる道の経路としては、おもに谷川沿いが利用されていた。一方で、この谷道を横につなぐ道もいくつか確認できる。そうした道の存在を下から上にむけて辿っていく。

g. おりとひらのすそのよこみち 2〈北〉

この道は文字通り「おり戸ひら」の山裾に沿って横に進む道であり、西は狩尾村・的石村へ、東は「くわ原河」の渡瀬（3〈東〉）を越え小里郷へと向かう道に接続していたと考えられる。このように麓の集落を相互に結びつけることが基本的な役割であったが、前述のとおり「やこ大道七ゝまかり」（カリオザカ）の上り口とも接し、現在の三久保方面から外輪山上の矢護山方面へ行くアクセス道としての機能も果たしていた。

h. よこみち（いしほとけ一鳥聞石） 7〈北〉, 9〈南〉

外輪山上から麓へと縦に引かれた村の境界線と中ほどで直交する横道も通っていた。7〔馬場之村〕の北境「おさこのおもうちより、さとはよこみちのいしほとけきやうしちはたけのたつみのすみをかきる」の「よこみち」がそれにあたり、この道沿いに祀られていた「いしほとけ」が村の境界線との交点に位置していたことがわかる。「いしほとけ」の比定地であるイシボトケが、「おさこのおもうち」の比定地オモウチガウドと現、西小園集落との中間点にあたることから、この「よこ

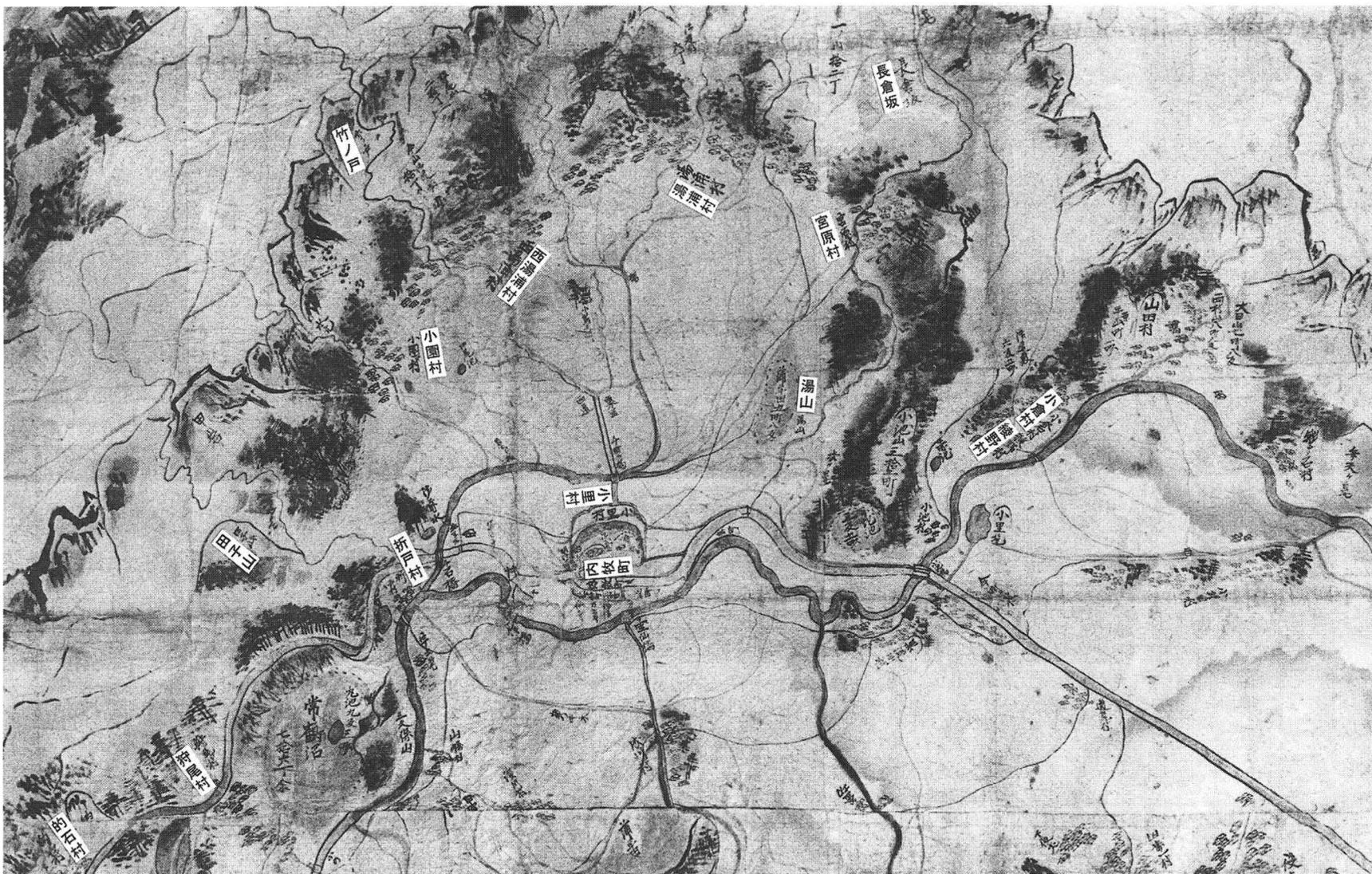


図5 宝暦3 (1753) 年「内牧手永絵図」(部分写真)
(熊本県阿蘇郡阿蘇町湯浦, 吉岡家所蔵。本稿と関連する地名には印字を付した。)

ミち」は山腹を横に進む道と推定できる。とすれば、9 [中尾] の南境「にれの木谷より、さとハよこみち鳥聞石まで」の「よこみち」は同一線上の横道となろう。中尾村の南に隣接する8 [野付之村] の北境には「にれの木谷の大道かきり」とあり、「よこみち」が「にれの木谷の大道」と直角に交差していたことも推測できる。ところで、9 南境では「よこみち鳥聞石まで」と記されているが、「鳥聞石」の比定地トリキキイシはニレノキダニから北東へ1 km以上離れた地点にあるので、「鳥聞石まで続くよこみち」を意味する表記と解釈したい。⁽³⁶⁾

以上の検討から、西小園のイシボトケと西湯浦のトリキキイシとを結ぶ山腹の横道が存在し（標高550 m前後のライン）、「にれの木谷の大道」をはじめとする幾本かの谷道相互を横につなぐ役割を果たしていたと考えられる。

i. はたへのよこ大道 1 〈北〉, 22 〈東〉

宝暦3 (1753) 年の「内牧手永絵図」には、外輪山上の内側をふちどりながら縫う尾根道が描かれている。この道を拡幅・整備し1973年に完成したのがミルクロードで、湯浦郷故地内でのルートは現在のミルクロードとほぼ一致している。⁽³⁷⁾ 注文では、1 [おり戸ひら] の北境に「はたへのよこ大道」、22 [としの、かくら] の東境の一角に「はたへ大道」が見えるばかりで、この2つの大道がつながっていた確証は得られないが、別の同時代史料からひと続きの道であることが確認できる。すなわち、応永16年9月26日、阿蘇社領権大宮司方催促方田数坪付注文〔肥後阿蘇家文書〕の記載によれば、東原・上恵良・内田・城・今山・中尾・中蘭・戸無の各村の山野は「はたへたいたう」もしくは「はたへよこたいたう」までと定められており、一方、馬場・小蘭・室蘭・中島・野付の山野は「よこたいたう」までとあるが、これも同じ道を指すと判断できるので、つまり、「おり戸ひら」と「としの、かくら」の間に分布した村々の山野領域の上端を横に結ぶかたちで「はたへのよこ大道」が通っており、そのルートは現在のミルクロードに近いものであったと推測できるのである。

(3) 小括

「山野境注文」はこのほかにも、「こめの山大道」(1 〈東〉, 2, 4 〈東西〉)、「ハにの石の下のみち」(2)、「おさこの大道」(2 〈西〉)、「かたほこのしたのみち」(3 〈北〉)、「山若(カ)すその道」(4 〈東西〉)、「うつけ河のよこ道」(4 〈東西〉)、「ふるてんしのもとのよこみち」(22 〈西〉)といった道を記す。これらは現地比定ができず詳細な検討はできなかったが、道の呼称が「大道」・「横道」・「道」の3者いずれかに区分されている点に注目しておきたい。主要幹線が「大道」、バイパス的役割を果たす道が「横道」、その他が単に「道」と呼ばれていたと推察される。そして、先の考察によって、麓の里と外輪山上とを縦につなぐ谷筋を中心に「大道」が通り、この縦のルートを山裾・山腹・山上にそれぞれ設けられた「横道」が互いに結ぶかたちでの湯浦郷の交通体系が、断片的ながらみえてきたのではないだろうか。この縦を基軸に横にもつながった交通のあり方は、道を媒介とした低地(耕地・沼沢地)―里(集落)―カルデラ内壁部(山野)―外輪山頂上部(狩場)相互の有機的な関係を示唆しており、外輪山上の端辺を「人の生活から遠い辺境の地」とみなしてきた従来の評価は、⁽³⁸⁾ 根本的な見直しを迫られることになろう。

湯浦郷の交通体系は、湯浦郷と外部世界とをつなぐ窓口の存在も示唆している。宝暦3年の「内

「牧手永絵図」は、湯浦・宮原両村から上る長倉坂は小国道に、西湯浦村から上る竹ノ戸坂は津江道に、小園村から上る坂は深葉への道にそれぞれ接続する坂道として描いている。さらに、小国道は久住への道に、津江道は菊池道へと続いていた。また、湯浦郷故地の各集落から頂上へ上りきった地点は全て端辺の環状線でつながれ、この道は大津方面へと延びる道でもあった。すなわち、18世紀の湯浦郷故地は外輪山上への坂道と端辺を通過する道とを介して、久住・小国・津江・深葉・菊池・大津といった各方面とアクセスができる土地柄であったことがうかがわれるが、この条件はどの程度中世にもあてはまるのだろうか。麓の里から山上へと上る複数の坂道と、それを到達点でつなぎ合わせる端辺の横大道の存在は共通しているから、各方面へと往来できる道の整備が、室町時代⁽³⁹⁾にある程度進められていたことは確かであるといえよう。

④……………境界地名の語彙分析

つぎなる検討課題は、湯浦郷内の境界区分にみられる空間把握と環境認識の問題である。村々・公方分の領域を分かち境界線はどこに引かれ、そのラインはどのような特徴をもつ空間として把握されていたのか。空間把握の特徴をつかむとともに、当時の住民の環境認識についても、境界の指標として使用された地名の名づけ方を通して、できるだけ多く析出していきたい。「山野境注文」の記載順序に従い、山野境の起点であるカルデラ内壁上部から麓の里へと順に下るかたちで、境界線を構成する地名語彙をとりあげていく。

1 山野の地名

(1) カルデラ内壁上部

j. うそ、おさこ

9 [中尾] と10 [内田之村] との山野境は「へつたうかうその水おて」に始まる。「へつたうかうそ」は現在地名ベツトウガウドに比定できるが、ベツトウガウドはベツトウガウスとも呼ばれ、「へつたうかうそ」が音便変化した名称であることを窺わせる。西小園地区の話者によると、ウド⁽⁴⁰⁾とは、カルデラ壁上部の岩場と岩場との間にあって袋状になった凹地に付いた地名で、ナカダン(中谷)やワンドとも呼ぶ地形を指すという。そこで、図4でベツトウガウドの地点を確認すると、先阿蘇火山岩類の上に阿蘇—1火砕流が堆積して急崖を形成した後、さらにその上部に阿蘇—2火砕流が堆積してできた崖が崩れてできた地形であることが判明した。ウドあるいはウトは全国的に分布する地形用語で、その用例が示す地形も様々だが、『地名用語語源辞典』は共通する特徴として「崩壊地形、浸食地形」を示す用語である点をあげている⁽⁴¹⁾。「へつたうかうそ」の「うそ」には崩壊・浸食地形としての意味が込められていたことになろう。

7 [馬場之村] と8 [野付之村] との山野境の起点である「おさこのおもうち」と類似する現在地名のオモ(ウ)チガウドもウド地名である。湯浦郷故地でサコは、①境、②ひっこんだ所、③崖を意味するという⁽⁴²⁾から、「おさこ」は先のウド地形を形容した別の表現と考えられる。では「おもうち」は何を意味するか。現在、地元でその意味を理解する話者はいなかったが、『地名用語語源

辞典』を参照すると、ヲ（峰）＋モ（「表面」あるいは「あたり」，「方向」を示す接尾辞）＋チ（場所を示す接尾辞），の複合語であった可能性がある。オモチガウドから下へは尾根が続くが，ウド地形「おさこ」を上端とする尾根筋のことを「おさこのおもうち」と称していたと推測しておきたい。

先述の通り，切り立った岩場は「戸」と形容されたが，「戸」と「戸」に挟まれた凹地や崖は，その崩壊地形のさまから「うそ」あるいは「おさこ」と表現されたのであった。下（里）から見上げた視点で命名された「戸」に対し，「うそ」や「おさこ」には間近な視線を感じ取ることができる。また，崩壊地形という特徴を地名に付すことで自然災害がおりうる危険地帯を暗に示す，といった認識も読みとることができるかもしれない。

(2) カルデラ内壁中間部

k. 谷

先の考察で，外輪山上と麓の里とを縦につなぐ主要な道は谷筋を通っていたことを明らかにしたが，山野の境界線もまた谷筋にもっとも多く引かれている。それだけに個々の谷の識別は重視されたようで，谷を接尾辞とする複合語の種類はきわめて多い。パターン別に列挙してみよう。

【石＋谷】かうこ石の谷，うとミ石の谷，鳥聞石の谷，ひられ石の谷

【石＋位置＋谷】鳥聞石のもとの谷，よこいしの西の谷，よこ石のひがしの谷

【木＋谷】にれの木谷 【信仰物＋谷】山の神の谷，しくれとの山の神の谷

【地形＋信仰物＋谷】おはたの山の神の谷 【信仰物＋位置＋谷】おんはちの西の谷

【藪＋谷】なかはやふの谷 【人名＋藪＋谷】二郎九郎やふの谷 【田＋谷】ひへ田谷

【島＋谷】あさ島の谷 【山＋谷】長山の谷

【道のポイント＋位置＋谷】やこ大道の七々まかりのきたの谷

「谷」を特定するために用いられたランドマークとしてまず挙げられるのが「石」である。「鳥聞石のもとの谷」（8〈北〉）という用例は，指標となった石が谷傾斜部の上にあったことを示唆しているが，他の事例ではどうか。西小園地区の話者によれば，「かうこ石」に比定できる西小園のコウゴイシは，麓からも見上げることができる張り出した巨石であり，湯浦地区の話者によると，「よこ石」の比定地である西湯浦のヨコイシも1m 50cm～2mの大きな石で，出っ張っているという。つまり，麓からでも確認できる谷地形上部の巨石が，「谷」の位置を示す指標の役割を担ったことになろう。点のランドマークとしては他に「木」（「にれの木」）と信仰物が認められる。

「谷」の形容語で複数出てくる信仰物は「山の神」である。「山の神」と「谷」の位置関係については，それを明示した表現（例えば，「山の神のもとの谷」，「山の神の西の谷」）がないことから，谷道沿いに「山の神」が祀られていた可能性が高いと考えられる⁽⁴³⁾。5〈北〉・6〈南〉境の「山の神」は下前川沿いの谷道に，11〈北〉・12〈西〉境の「山の神」は「おいをろのおもうち」より下った谷道沿いに祀られていたと推定される。これら「山の神」の信仰物としての性格は詳らかではないが，山の谷道を利用した山の生業に関わる信仰対象であったことは間違いなからう⁽⁴⁴⁾。谷道沿いに主に祀られた「山の神」に対して，谷の傾斜部の上に位置する信仰物を窺わせるのが，15〔室蘭〕と16〔上恵良〕の境の「おんはちの西の谷」という記載である。「おんはち」は湯浦・西湯浦両地区

の鎮守（湯浦八幡宮・西湯浦八幡宮）の前身との伝承をもつ男蜂宮で、⁽⁴⁵⁾ 応永16年の「田地坪付」には1反の免田が記されている。

以上とりあげた「石」・「木」・信仰物は、後で検討する「尾」の形容語でも見いだすことができる。これに対し、「藪」・「田」・「畠」といった土地利用を示す「谷」の形容語は、一例を除き「尾」ではみられない語として注目できる。まず「藪」では「なかはやふの谷」（10〈北〉・11〈南〉境）が検出できる。この地名は現在継承されていないが、「なかはやふ」の宛字が「長葉藪」であるとすれば、イラクサ科の多年草である長葉藪真麻（ながばやぶまお）⁽⁴⁶⁾の分布地であった可能性が出てくる。真麻はカラムシ（苧）の異称であり、⁽⁴⁷⁾ 木綿以前の中世においては庶民に最も親しまれた衣料であった。⁽⁴⁸⁾ 湯浦郷の応永16年「坪付・山野境注文」に接続する「土貢・公事注文」によると、当時湯浦郷の村々には「門苧」や「こき苧」が地頭・中司双方の公事物として賦課されていたが、この「苧」の採取地の一つが「なかはやふの谷」であった可能性を示しておきたい。15〔室蘭〕東境の「二郎九郎やふの谷」にみられる「二郎九郎」については未詳であるが、地名に人名を付す名づけ方から土地利用空間としての性格を読みとることができる。「ひへ田谷」（16〈東〉・17〈西〉境）や「あさ畠の谷」（20〈東〉・21〈西〉境）といった地名は、谷筋に沿って耕地が展開していたさまを彷彿とさせる。⁽⁴⁹⁾

1. 尾

山野の境界が引かれたラインとして谷について多いのが尾である。尾を接尾辞とする複合語には次のようなパターンがみられる。

- 【石+尾】しろ石か尾 【村名+木+尾】したかのならの木の尾
- 【山+信仰物+尾】山のめんはちの尾 【山+地形+尾】篠山のくらかた尾
- 【瀬+尾】瀬尾 【つゝ+位置+尾】つゝ内の尾 【村名+尾】城之尾
- 【村名+位置+しりなし+尾】野付之うへのしりなし尾
- 【牟田+位置+しりなし+尾】こむたのくちのしりなし尾
- 【藪+しりなし+尾】ふたまたやふのしりなし尾

「尾」の位置を示すランドマークのうち「石」・「木」・信仰物・「山」は、「谷」でも用いられた指標であった。「しろ石か尾」（13〈東〉・14〈西〉境）の「しろ石」は、カルデラ壁上端部に存在する白い岩を指し、その下にのびる尾根を「しろ石か尾」と称したと考えられる。⁽⁵⁰⁾ 「ならの木」は、狭義にはブナ科の落葉高木コナラを指すが、それに近似のミズナラ、ナラガシワなどの落葉樹を含む総称かもしれない。⁽⁵¹⁾ いずれにせよ「したかのならの木の尾」（20〈西〉）は雑木山ということになるろうか。応永16年の「土貢・公事注文」は湯浦郷村々が負担する師走節料として「炭籠」・「積木」を挙げている。これらの貢納物は村の雑木山から調達されたものと考えられるが、それ以上に雑木山は村の自給経済を支える場として重要な役割を果たしたであろう。

信仰物の「めんはち」は、西小園地区の鎮守である小園八幡宮の前身とされる女蜂で、天平3（731）年に下り山に勧請され、文明13（1481）年に阿蘇惟家大宮司が現在地（西小園集落）に遷座したという社伝をもつ。⁽⁵²⁾ これを裏づける史料はないが、「山のめんはちの尾」（4〈東西〉）は下り山に比定できることから、少なくとも15世紀初頭までは下り山の尾根上に女蜂が祀られていたことは確実であるといつてよい。「山」が「尾」や「谷」の前に付くのは、「山」が山地の包括名称

であることに関わるが、この点については後述する。村名は、「尾」の複合語に特有の形容語である。これは「谷」の複合語にみられず、「尾」と「谷」の占有上の違いを示唆するが、詳細な検討は課題として残しておきたい。

「尾」の複合語のもう一つの特色は、地形語を伴う語彙の多さにある。「くらかた尾」(22〈東〉・23〈北〉境)の比定地クラカタオは、山が二つあり、鞍のような形をしていたために名づけられた地名といわれている。⁽⁵³⁾複数検出できる「しりなし尾」は現在でも地元で使用される地形用語で、末端が途切れた尾根を意味する。湯浦郷故地のカルデラ内壁は小規模な崩壊が繰り返し発生するような斜面を有しているが、水量が少なく水が抜けやすい尾根の場合、粘性が弱い土石は流れにくく、厚みがあり末端が急な地形を形成する。一方、多量の水を含む尾根では土石流が起こりやすく、なだらかにのびた尾を形づくることになる。前者を「しりなし尾」、後者の尾のさがった先端部を「おさき」(24)と表現する「山野境注文」の記載は、地形的特徴を的確にとらえたものと評価できる。さらに、前後に語を接続させることで、尾の末端部の情報はより豊かな形で示されることになる。順に見ていくと、「野付之うへのしりなし尾」(9〈北〉・10〈南〉境)は、「野付之村」の里の上限が「しりなし尾」であったことを示す。「こむたのくちのしりなし尾のミつはきあひをかきる」(11〈南〉)という文章からは、谷と谷に挟まれた尻無尾の先が谷川の合流点(水吐合)となり、そこが山野境の終点でありかつ湿地帯の入口でもあった景観が浮かび上がる。12[城之村]〈東〉境の「ふたまたやふのしりなし尾をかきる」は、13[今山]〈西〉境の「ミつはきあひをかきる」と対応する。とすれば、この境界線も尻無尾の水吐合が終点で、二本の川が合流する付近(「ふたまた」)⁽⁵⁴⁾に藪が分布していたということになろう。

「ゆやまのすそのはきあひのいりむたのおさきをかきり」(24)は、漢字を宛てると「湯山の裾の吐合の入牟田の尾崎を限り」となる。尾崎の合流点は牟田地帯にまで入り込んだ景観を呈していたのであろうか。湯浦地区の話者によると、地元には「オサキ、カワサキ、ドウノマエには家を建てるな」という言い伝えがあるという。オサキは鉄砲水が出る所、カワサキは川が小さく寄り合った所で、いずれも大水のときには危険な場所である。ドウノマエに家を建てることと神様の前を塞ぐことになるからこれもタブーとなる。「山野境注文」に記された「おさき」や「ミつはきあひ」といった名称にも、危険な場所を暗示する役割が日常的には課されていたとみるのが自然であろう。

m. 山

カルデラ内壁傾斜部は上から下まで広義の山地地形に属するが、「山野境注文」では特定の地形を指して「山」と呼んでいる。その実体を明らかにするために、現地比定できた「山」のデータを最初に提示しておきたい。

【こめの山】「こめの山」という地名は伝存しないが、元折戸牧野と元浜川牧野の境界の牧欄に沿った谷をコメヤマダニ(米山谷)と称するから、この谷の上が「こめの山」であったと考えられる。⁽⁵⁵⁾当比定地は外輪山上の縁辺部、ミルクロードと内壁急崖とに挟まれた小山で、標高957mを頂点にまとまった山谷を示す。

【たこ山】折戸集落の背後に位置する標高653.5mを頂点とする田子山で、カルデラ内壁下部の凸起した地形である。

【かたひら山】「かたひら」は片方が傾斜部(ヒラ地形)の地形を指す表現と考えられ、田子山

の北側に位置する下り山に比定できる。この山も内壁下部の凸起した地形で、北東から南東にかけて急斜面を形成している。

【篠山】南宮原の集落から真東に内壁斜面を上り、国道212号線に出る手前にあるスズヤマに比定できる。内壁上部に位置し、標高714mを頂点に縦長の山容を示す⁽⁵⁶⁾。もっとも「山野境注文」には「篠山のたうめかはな」や「篠山のくらかた尾」という表記がみられ、中世においてはスズヤマの北（遠見ヶ鼻＝大観峰）と南（クラカタオ）を含む広域地名としても使用されていたことがわかる。

これらの「山」に共通する要素は、頂上部を中心にまとまった山容を示している点にあらう。③で述べたように、湯浦郷の山地は上から、比較的平らなカルデラ上面（端辺）—急崖が連なるカルデラ内壁上端部（戸）—20度前後の一般斜面から10度前後の緩斜面へと推移する内壁斜面（ひら）、という地形で構成されるが、その各地帯にあつて高く凸起した地形がとくに「山」と呼ばれていたと理解できる。こうした地形は遠目でも確認しやすいために、境界指標として用いられることが多かったと考えられる。

「山」の複合語の特徴は、他の語を接続させる用例の多さに求められる。「谷」や「尾」が後に続く用例はすでに取り上げたが、その他にも「たこ山のきたむき」（4〈東西〉）、「かたひら山のせ」（5〈南〉）、「山ハきののほりと」（15〈東〉・16〈西〉境）、「おひら山のにしのはのせ」（19〈東〉）といった表記がみられる。このように「山」は単独で境界指標となるよりも、包括地名として使われる場合が多かったが、それは細やかに境界を表現するためには、「山」の部分名称の活用がより有効であったからに違いない。また、「山」は道の通過点でもあった。麓の里から外輪山上へは主に谷道が利用されていたが、「山」地形にさしかかると峠を越えて先に進まねばならない。「すゝ山の大たうけのあくた神」（24）という表記からは、篠山に大きな峠道が通り、そこにあくた神が祀られていた光景が浮かび上がる⁽⁵⁷⁾。

2 里の地名

(1) 集落

n. 居屋敷

「村」の境界線はその性格上、集落の中心部に引かれることは少なく、居住地を示す「居屋敷」に達する境は、5〔こそこの村〕の北境と7〔馬場之村〕の南境の2例だけである。2例とも「谷」と「居屋敷」を結んで境界線が引かれているが、このルート上に谷道が通っていたとすれば、谷道に沿って「居屋敷」が分布し、それが境界標識として現れたという解釈が成り立つであろう。応永16年9月26日、阿蘇社領権大宮司方催促方田数坪付注文⁽⁵⁸⁾には、湯浦郷の18か村のうち10か村に「さんやいやしきひとのほり」という記載がみられ、過半数の「村」が「居屋敷」の上に山野を有していたことが判明するが、その多くが「居屋敷」を山野の境界の延長線上には設けなかったことに注意を払っておきたい。

(2) 地形と日照条件

o. したか, ひら

次に日照条件に関わる地名に注目しておきたい。湯浦郷24か村のなかには山野をもたない村がある。したか村がその一つだが、「したか」という地名は「したかのおくひのさこたち」(19〈西〉)や「したかのせきしやうかやふ」(19〈東〉)など「山野境注文」にも散見する。注文に登場する「したか」は村名(広域地名)としてとらえる必要があるが、狭義の「したか」はシダカという場所に比定できる。湯浦地区の話者によれば、シダカの宛字は日高で、地名の由来は「高い所で日がよくあたる」からだとされるが、この環境認識は中世にまで遡ることになる。

「きたむきのひら」(4〈東西〉), 「北のひら」(23〈南〉), 「みなミのひら」(24)のように「ひら」地形を方位で区分する語法にも、日照条件に関わる認識が投影されていた可能性がある。斜面を意味する「ひら」地形の場合、その向きによって日照時間が大きく異なってくるからである。「たこ山のきたむき」(4〈東西〉), すなわち田子山の北側斜面について折戸地区の話者は、日当たりが悪く、木も草も育ちが良くない場所だと語る。一方、湯浦地区の話者からは、①日当たりの悪い〈北のひら〉は湿度が高いため杉などの植林に向く。②〈南のひら〉と〈東のひら〉は朝の日照りがよいので草立ちが多く、土地がやわらかくて原野向き。③〈西のひら〉は原野に向かず、条件が悪いので他の利用価値も低い、という評価を聞くことができた。このように現在の住民は、地形・日照・土壌・植生といった複数の環境要素を加味しつつ土地の状態を総合的に判断し、土地利用の選択を行っている⁽⁵⁹⁾。「山野境注文」が記す「ひら」地名から多様な環境認識を直接読み取することは難しいが、「ひら」を方位で区分する第一の理由は、日照条件に対する認識に求めることができるのではないだろうか。

(3) 扇状地

湯浦郷のうち西小園の中部から西湯浦、湯浦、南宮原の中部にかけての山麓はいわゆる扇状地⁽⁶⁰⁾で、川が平地に流れ出る谷の出口には、圃場整備以前においては土石流などで堆積した地形が点在していた。この扇状地の景観が「山野境注文」ではどのように把握されているのか、順にみていくことにしよう。

p. 水吐合, 井手のおもて

「村」の山野境の末端で最もよくあらわれる地名は水吐合である。尻無尾の先が谷川の合流点(水吐合)となり、そこが山野境の終点であり湿地帯の入口でもあったことについてはすでに述べた。その他にも「大河のはきあひ」(3〈東〉), 「たいらか原のはきあひ」(16〈東〉・17〈西〉境), 「ふる山の神のはきあひ」(18〈東〉・19〈西〉境), 「ゆやまのすそのはきあひ」(24)など吐合を山野境の終点とする事例は多い。大河(黒川)とくわ原河(花原川)の合流点を指す「大河のはきあひ」以外は、カルデラ内壁上端の岩場や斜面の湧水を水源とする谷水が合流して平地に出る地点を言い表したものである⁽⁶¹⁾。さらに、「よこ石のひかしの谷をくたり, 井手のおもてまてかきる」(15〈東〉)という文章からは、谷水の集水地から井手(用水路)が引かれ田が潤されていた場景が読みとれる。

q. せきしやうかやふの河, かうかのわたせ, くわ原河

里を流れる河川には、周囲に群生する植物の名前を冠したものがいくつかあり、河畔の景観を知る手がかりが得られる。例えば、20〔北之村〕東境の「下ハセキシヤウカヤフの河をかきり、かうかのわたせまで」という記述からは、河沿いの藪に石菖（セキショウ）が群生し、この河と道とが交差する渡瀬に合歓（ゴウカ、コウカ）が生えていた光景を思い浮かべることができるだろう。石菖は溪流のふちなどに群生するサトイモ科の常緑多年草である。湯浦地区の話者によれば、湯浦ではどこの川にも石菖は生えていた。魚が寄りつく草で、石菖を水中に入れておくとドンコなどがよくとれたという。また、5月5日の端午の節句には魔除けに石菖を軒につるす習わしが湯浦でみられたことも報告されている。⁽⁶²⁾「かうかのわたせ」は、通称地名コウカノワタセに比定できる。湯浦地区の話者によると、現在この渡瀬には小さな合歓が生えているという。合歓はネムノキの異名で、マメ科の落葉高木。高さは6～9mで、渡瀬のランドマークになる合歓の大木が存在したのかもしれない。山野の日当たりのよい所に生え、樹皮は駆虫薬に用いられる樹木である。⁽⁶⁴⁾

「くわ原河」（3〈北〉〈東〉、4〈東西〉）には現在「花原川」という字が宛てられるが、本来の語義は「桑原の河」で、河川沿いに桑が群生し、原と呼ばれていた可能性も考えられる。湯浦地区の話者は、花原川と内牧の間に桑畑が広がっていた大正時代の光景を記憶されていた。なお、現在の花原川は湯山の西から小里の北側を通過して西へと流れるが、近世の花原川は湯浦郷の中央平地を各谷から出た小河川の水を集めて南流してから黒川へと合流するコースをとっており、大きく流路を異にしている（図5）。

r. おさき、すさき、すきつか

先に「おさき」という地名を、土石流が堆積して形成された裾の長い尾根と説明したが、「すさき」も土石流の堆積によってできた地形をあらわす名称と考えられる。8〔野付之村〕の北境に出てくる「いちか宮のひつしさるのすさき」は、一宮との位置関係から判断して居塚川と西小園川に挟まれた微高地に比定できる。1976年に始まる圃場整備事業以前、ここには段々状の乾田が広がっていた。土壌は石原で、水もちは悪かったという。西小園地区の話者は、この砂州になった微高地をベツウガウドが崩壊して発生した土石流による堆積地形とみている。土石流は谷川下流の兩岸に堆積して自然堤防を形成することがあるが、「すさき」比定地も、ベツウガウドに水源をもつ西小園川が平場に出た地点の左岸に位置しており、話者の推測は当を得たものといえよう。さらに、この見解を裏づける事実として、「すさき」比定地の北側の通称地名スギノモト（大字西小園小字野付地番98）から圃場整備の工事中に針葉樹の根が出土したという話も同じ話者から聞くことができた。スギノモトは、ベツウガウドとその北のジョウノの両方からの土石流のライン上に位置し、埋没していた針葉樹は岩場が崩れた際に流出した岩木ではなかったかと話者は語る。スギノモトが、杉などの流下・埋没を示す地名であるならば、8〔野付之村〕北境に記された「すきつか」も杉塚を意味し、土石に混じって杉などの流木が堆積した微高地であった可能性も十分に考えられるところである。

(4) 「村」の境界からみた「里」の景観

「村」の境界線はほとんどが谷筋か尾根に引かれ、その終点は谷水の出口である水吐合や平場に突き出た微高地（おさき・すさき）であった。山野境が途中から里境へと移行するケースも少なく

ないが、里境も大半が谷の先や尾の先に引かれ、「居屋敷」のある集落に境界線が設定された事例は2例にすぎない。この事実は裏返すと、境界から隔たった「里」の中心（集落）は、谷の先（水吐合）や尾の先（おさき）には設けなかったことを示唆しているのではないだろうか。近年では1990年頃、集中豪雨で西湯浦地区のジョウノの上の岩場が崩れ、土石と木が流出して下の中無田集落にまで達したという例がある。⁽⁶⁵⁾土石流によって形成されたオサキは土石流を繰り返す危険地帯であるし、集中豪雨がおこると上の岩場では滝ができ、下のカワサキでは洪水がおきると地元では言われている。水が落ちる場所は「山野境注文」でも「へつたうかうその水おて」（9〈北〉・10〈南〉境）や「おひら山の大水おての谷」（21〈西〉）のように「水おて」と表現されており、水吐合や「おさき」、「すさき」と同様、洪水や土石流に関わる危険ポイントとして把握されていたことになる。そして、こうした危険地帯を避ける形で集落の立地選定がなされたと考えられる。もっとも谷と谷、尾と尾の間に集落をつくるとなると広いスペースは確保できず、この山の地形に規定された「里」の景観が、24か村に及ぶ小規模で多数の「村」の設定の規定要因として作用したとみることができるのである。

⑤……………まとめ——生活空間と環境認識

本稿では記録地名の語彙分析を進め、地名語彙そのものに投影された空間把握や環境認識のあり方を抽出する作業を個別におこなってきたが、最後にその成果をまとめ、残された課題にもふれておくことにしたい。

湯浦郷の集落は背後に山野をひかえる立地環境にあったが、その地形は傾斜面で、外輪山を利用するためには約400mの高低差を往復する必要があった。だが、中世の住民にとってカルデラ内壁は生活を阻む障壁とはならず、湯浦郷の生活空間はむしろ里と山上とを結ぶ「大道」が軸線となって構成されていたことは④の考察で明らかにした通りである。内壁の勾配は上に進むにつれて急となり、上端には切り立った岩場が存在するので、「大道」といっても急崖付近では道幅が狭く険しい道りであったことは想像に難くない。それでもこの坂道が主要幹線として使われた理由としては、①外輪山を介した外部世界との交通と、②外輪山および内壁の生活空間としての重要性、の2点を挙げることができる。①については湯浦郷の低地が牟田と呼ばれる広大な沼沢地で、交通ルートとしては危険を伴ったこと。他方、山上の尾根道は起伏量の少ない直線コースであるため遠隔地への交通路には適しており⁽⁶⁶⁾、この尾根道へのアクセス道路としての役割を担ったのが内壁斜面の坂道であったといえよう。②に関しては、公方分と村々分に分けて整理しておく。

湯浦郷内の外輪山上には「年の神」が勧請され、山上の「はたべ」に「ひへかくら」、「年の神」から下った内壁斜面に「としのゝかくら」という公方（大宮司）分の狩蔵がそれぞれ設けられたと考えられる（25 [はたへのひへかくら]、22 [としのゝかくら]）。「年の神」は阿蘇社の社家が奉斎する歳祢社の祭神で、その祭りは田作祭りと呼ばれる。田作祭りは社家宅を回りながら6夜7日続くが、中世の神事記録によれば、初日の三太夫宅での祭りで歳神（年の神）に猪鹿と雉とが供えられている。この鳥獣が湯浦郷の狩蔵から調達されたものかどうかはわからないが、「としのゝかくら」はその名称から推して「年の神」に捧げる鳥獣を捕獲する獵場という名目で、狩蔵に指定さ

れた場所（住民にとっては禁猟区）であったと考えられる。一方、「年の神」が分祀された外輪山上の「はたべ」の狩蔵では、猪を獲ればかぶ（頭）を出し、鹿を獲れば皮を出すという条件で住民にも用益が認められた（25）。阿蘇品保夫氏は「はたべ」を「公方分と云っても無主の荒野同様」と評価しているが、条件付きで住民の狩猟を認めていること自体、外輪山上における住民の日常的な用益に着目した領主側の対応とみるべきではないだろうか。公方分山野は内壁部に残り3か所が設定された。そのうち「おり戸ひら」は別の同時代史料から、公方御馬飼所秣田であったことが判明する。⁽⁶⁹⁾すなわち、大官司の馬の放牧地兼採草地であったことになる。

このように内壁斜面の一部は領主専用の山野として割き取られたが、大半は短冊形に各「村」の山野として分有が認められた。「山野境注文」から知られる村々山野の利用実態は断片的であるが、④において①炭焼きや薪の採取などの場であった雑木山の存在と、②「谷」における藪・田・畠の展開について示した。その他、応永16年の「土貢・公事注文」には村々の地頭分公事として、蕨、山芋、素麺、小豆、木、雉の鳥などが見えるので、これらの産物も殆どが村々の山野で得られたものと考えてよいだろう。また、中司分には「すき（犁）」や「まんか（馬鋤）」を携行して農作をつとめるといふ夫役があり、当時すでに畜耕が行われていたことがわかるが、この牛馬の放牧地や採草地も村々山野の中で確保されていたことが予想される。さらに、阿蘇社の建物の造営や修理時には建築材が郷村に課され、湯浦郷も負担しているから、この材木が村々山野から伐り出された可能性もある。以上の検討から、内壁斜面に存在した村々山野が領主・住民双方にとっての重要な生業の場であったことは間違いない。山野用益の秩序については詳らかでないが、山の谷道沿いに分布した「山の神」が秩序維持に関わる存在であったことは想定しておく必要がある。

「山野境注文」から直接読みとれたのは用益の実態ではなく、むしろ地形に対する認識であった。とりわけ中世湯浦郷の住民は崩壊地形の状況をよく把握していたといえる。「うそ、おさこ、水おて、水はきあひ、しりなし尾、おさき、すさき、すきつか、」といった地名は、土石流や水害を繰り返す湯浦郷の地形環境のなかで、災害時に危険性が高い場所の地形的特徴を的確にとらえたものといえるだろう。内壁上端部から山麓の扇状地までの広がりをもつこれらの地名は、自然災害時には一群の危険ポイントとして体系的に認知されることで、防災に役立ったであろうし、集落立地にも影響を与えたことは先に推測した通りである。また、現在の住民は、地形の細やかな認識を日照・土壌・植生といった他の環境要因に対する認識と総合させることで、土地の状態を判断し、土地利用の選択基準にしているが、自然的要素をもつ中世の地名についても、環境認識の体系を構成する語彙としてその本来の性格は捉えることができると考える。

環境認識の体系は、同じフィールドであっても時代とともに変化を遂げる。そのことは認識体系の表象である地名の語彙変化が間接的に証明してくれるだろう。例えば、先に挙げた中世の崩壊地名のうち「おさこ」と「水おて」という語彙は、現在では失われ、ワンドとタキ地名がこれらに変わる名称として用いられている。一方、「すさき」や「すきつか」といった表現は今でも住民に理解されるが、比定地に同じ地名は継承されていない。こうした中世と現在との間にみられる懸隔の背景には、おそらく①地形・土壌・植生・土地利用・水利など外的な環境変動に加え、②環境を認識し命名する人間の内的な変化（視点と心理）⁽⁷²⁾や、③地名を整理する法制度・社会的枠組みの問題があり、複数の次元からの分析結果を相互に関連づけて考察することで、彼我の差はより構造的に

説明しうる段階へと向かっていくであろう。もとより、記録地名から抽出した中世の環境データ自体、今後、地理学・地質学・考古学・生態学・民俗学・言語学などの諸学による再検証のふりにかけて、精度を高めていく必要があり、現在との比較を行う前にしておくべき課題は多い。とはいえ、中世の環境を考える上でも当時の現実問題をとらえる同時代的視点は不可欠であり、本稿が現在地名による環境認識の解析に着想をえたように、環境の問題を扱う現在学との対話が歴史研究の新たな可能性を切り拓く役割は少なくないはずである。

[付記]

本研究にあたり、阿蘇町での現地調査では、岩下西雄氏、高本積氏、猪飼清博氏、松本久志氏の方々から貴重なお話を聞くことができた。絵図の写真掲載にあたっては吉岡祐一氏にお世話になった。また、熊本大学教育学部の横山勝三教授には地形・地質に関する懇切なるご教示をいただいた。紙面を借り、厚く御礼申し上げます。

なお、本稿の作成においては、2000年度～2003年度日本学術振興会科学研究費補助金研究、基盤B(1)「現地調査の方法による中世村落・民衆像の再検討—地名資料の収集・可視化と科学的分析」(研究代表者：服部英雄，課題番号：12410090)の一部を使用した。

註

- (1)——この二つの方法論を1980年代に提起し、地名の史学を確立したのが服部英雄氏である。服部氏の仕事は、『景観にさぐる中世—変貌する村の姿と荘園史研究—』(新人物往来社、1995年)、『地名の歴史学』(角川書店、2000年)などの著作に結実している。歴史学による地名研究については、太田浩司「地名」(佐藤和彦ほか編『日本中世史研究事典』東京堂出版、1995年)を参照。
- (2)——関戸明子『村落社会の空間構成と地域変容』(大明堂、2000年)、19頁。
- (3)——山口恵一郎『地名を考える』(日本放送出版協会、1977年)、55～56頁。
- (4)——法制語と地形語の定義は、山口、前註書による。
- (5)——高橋学『平野の環境考古学』(古今書院、2003年)が、地形環境分析の理論を提示している。
- (6)——小地名を利用した環境認識の研究については、関戸、註(2)書、第一部第1章「地名研究の視点とその系譜—小地名の研究を中心に—」(初出は1988年)が、主要なものを紹介している。
- (7)——古田充宏「西中国山地における山村の土地利用と環境認識—広島県山県郡戸内町那須を事例にして—」(『地理科学』42-2、1987年)、33頁。
- (8)——関戸、註(2)書、第一部第5章「山村社会の空間構成と地名からみた土地分類—奈良県西吉野村宗川流域を事例に一」(初出は1989年)。
- (9)——米家泰作『中・近世山村の景観と構造』(校倉書房、2002年)、第二章「中世山村と山地空間—土佐国大忍荘横山における名の領域と空間認識—」(初出は1996年)。
- (10)——「阿蘇家文書」(『大日本古文書』家わけ13-1)、226号。
- (11)——領主の阿蘇社の立場では、公方分・村々の山野に境界線を引くことにこそ注文の作成目的があったはずで、そこに記載された地名は位置を示す符号以上の意味はもちえなかったと思われる。この点を考慮すると、「山野境注文」に記された地名情報には政治的選択が入りこんでおり、居住者の生活空間や環境認識を体系的に明らかにするうえでは断片的で偏った素材ということもできる。しかし、注文に出てくる個々の地名に注目すると、地形や植生に関するじつに細やかな知識によって表現されており、基本的に住民が名づけて語彙化したものが選択的に掲載されたと考えることができよう。
- (12)——「阿蘇家文書」202号。
- (13)——「阿蘇家文書」204号。
- (14)——杉本高雄『中世の神社と社領—阿蘇社の研究—』(吉川弘文館、1959年)、177頁。
- (15)——①阿蘇品保夫「南北朝・室町期における山野支配の展開—阿蘇社領湯浦郷と山本庄大清水村の場合—」(『史学研究』113、1971年)。ここで関説する阿蘇品氏の所論は当論文で述べられたものを対象とする。なお、

湯浦郷に関する阿蘇品氏の論稿には他に以下のものがある。②「阿蘇社領の支配形態」(『社会科研究』6, 1958年)。③「阿蘇大宮司権力の推移と知行制」(『史学研究』87, 1963年)。④「中世阿蘇社領の豪族屋敷跡について—阿蘇町西湯浦の電探調査の分析—」(『熊本史学』38, 1967年)。⑤「中世から生まれた村落」(『新・熊本の歴史3中世』熊本日日新聞社, 1979年)。⑥「阿蘇社と西巖殿寺」(熊本大学放送公開講座「阿蘇—自然と人の営み」熊本大学, 1994年)。⑦「中世阿蘇の原風景」(網野善彦・石井進編『中世の風景を読む7東シナ海を囲む中世世界』新人物往来社, 1995年)。

(16)——永原慶二「阿蘇社領湯浦郷の『村』について—中世の『村』の歴史地理的・社会構造的—一例証—」(『地方史研究』137, 1975年)は、阿蘇品氏の研究成果に依拠しつつ、極度に小規模な集落と耕地、山野、あるいは一戸の民戸とその付属耕地、山野から構成される湯浦郷の「村」を、支配の基礎単位と見ず、開発・定住の基礎単位と評価している。しかし、開発・定住の過程や集落・耕地・山野相互の関係についての具体的な検証は伴っていない。

(17)——阿蘇品, 註(15)①論文, 50頁。

(18)——阿蘇品, 註(15)①論文, 48頁。

(19)——筆者は熊本大学教育学部日本史研究室の院生・学生ならびに協力者とともに、1998年度から2001年度までの4年間、湯浦郷故地の各大字地区を対象とした現地調査にとり組み、各年度の調査成果を『熊本大学教育学部日本史研究室調査報告書』第2号～第5号として発表してきた。また、2002年度には4年間の個別調査を集成すべく湯浦郷の全域調査も実施したが、その成果は春田直紀・熊本大学教育学部日本史研究室「阿蘇社領湯浦郷故地の環境利用に関する総合的研究」(服部英雄編『中世景観の復原と民衆像—史料としての地名論—』花書院, 2004年)に示したので、参照されたい。なお、本稿の研究は以上の調査成果に依拠しているが、今回筆者独自に現地調査を実施して考察を加えた結果、上記調査報告とは異なる現地情報や見解を提示している箇所も含んでいる。このような事情から、既報告書を論拠とする場合は報告書名を、今回の調査にもとづく場合は聞き取り話者名を逐一明記していく。

(20)——以下、阿蘇の火山地形については、渡辺一徳「一の宮町史7 阿蘇火山の生い立ち」(一の宮町, 2001年)を参照。また、湯浦郷故地の地形・地質・土壌については、横山勝三氏からご教示を得た。

(21)——「山野境注文」記載の地名で現地比定できたも

のは図2に示したので、随時参照されたい。

(22)——②の【山野境記載全文】の記載番号・境界名と対応する。さらに省略する場合は、1〈西〉といった形で表記する。以下同じ。

(23)——「山野境注文」と同年に作成された、応永16年9月26日、阿蘇社領権大宮司方催促方田数坪付注文(『阿蘇家文書』225号)では、狩尾村に山野記載がみられない一方で、的石村の山野境の一部は「やこいたうミナミハ大かわをかきる」とされており、「おり戸ひら」の西隣には的石村の山野が接していたことが知られる。

(24)——湯浦地区の「戸下」(トシタ)における現代の土地利用と祭祀場所の変化については、柏木亨介「祭祀空間の再構成—祭祀の場所の移動を通して—」(『日本民俗学』237, 2004年)が考察を加えている。

(25)——フルオウカンは、江戸時代においては参勤交代道(豊後街道)の役割も担った。熊本県文化財調査報告第54集『熊本県歴史の道調査—豊後街道—』(熊本県教育委員会, 1982年)参照。

(26)——以下、本稿で折戸地区の話者による情報として記す部分はすべて、2004年7月17日に岩下西雄氏(1939年生まれ)から得た聞き取り内容による。

(27)——クグムタ(三久保の千町牟田)では1892(明治25)年から5年間の開発事業で、21町1反9畝15歩が水田化している。『阿蘇町史 第一巻通史編』(阿蘇町, 2004年), 810頁, 参照。

(28)——後藤是山編『復刻版肥後国誌 下巻』(青潮社, 1984年)510頁。なお、「山野境注文」には「く、牟田三分一、はうしやうゑ御まつりについて、狩尾のうちにわけつくる」という一文があり(2〈東〉)、室町時代、放生会神事に用いるクグを狩尾村が負担していた可能性も考えられる。

(29)——楠原佑介・溝手理太郎編『地名用語語源辞典』(東京堂出版, 1983年), 610頁。

(30)——『史料阿蘇 第一集』(阿蘇町教育委員会編・発行, 1978年), 89頁。

(31)——春田ほか, 註(19)論文, 図IV-1-1参照。

(32)——註(23)史料。

(33)——熊本大学教育学部日本史研究室調査報告書第3号『地名から探るムラの営みと歴史—熊本県阿蘇郡阿蘇町大字西小園地区の現地調査—』(熊本大学教育学部日本史研究室, 2001年), 51頁。

(34)——熊本大学教育学部日本史研究室調査報告書第2号『山野に生きる人々の営みと歴史—熊本県阿蘇郡阿蘇町大字湯浦地区の現地調査—』(熊本大学教育学部日本

史研究室, 1999年), 105頁~108頁。

(35)——以下, 本稿で湯浦地区の話者による情報として記す部分はすべて, 2004年5月16日に高本積氏(1920年生まれ)から得た聞き取り内容による。

(36)——「いしほとけ」, 「おさこのおもうち」, 「鳥聞石」の比定は, 春田ほか, 註(19)論文による。

(37)——富岡儀八氏は, この尾根道が近世において「小国から貢租米を大津米蔵へ運ぶ移送路であり, かつ, 肥後塩の移入路でもあった」ことを明らかにしている(富岡『日本の塩道—その歴史地理学的研究—』, 古今書院, 1978年, 52頁~54頁)。

(38)——大滝典雄『一の宮町史10 草原と人々の営み』(一の宮町, 1997年), 47頁, での中世端辺の評価。なお, 本書で大滝氏は, 外輪山上の草原の草が牛馬の飼料となり, その牛馬が厩肥を生産, これを田畑に施肥して米や野菜をつくるという「草地—家畜—耕地」を有機的に結びつけた農業によって, 阿蘇の厳しい立地条件(火山灰土壌・高冷地)が克服された営みを詳述している。もっともこれは, 近代の水田単作時代に照応したモデルであり, 中世の資源利用システムは独自に解明していく必要がある。

(39)——端辺から各方面へと通じる道の室町期における徴証として, 先に矢護山へ続く道と推定した「やこ大道」のほか, 註(23)史料で綾野郷山野の北境に出てくる「なみの(波野)・よこたいたう(横大道)」を挙げることができる。註(25)の報告書(10頁)は, この波野横大道を, 西は「湯浦郷山野北境の横大道・はたへ大道につながり, 東は波野村に達する外輪山上の大道であろう」と推定している。

(40)——以下, 本稿で西小園地区の話者による情報として記す部分はすべて, 2004年5月23日に猪飼清博氏(1928年生まれ)から得た聞き取り内容による。

(41)——註(29)書, 64頁。

(42)——註(33)書, 46頁。

(43)——ただし, 18〈西〉「おはたの山の神の谷」については, 「おはた」の比定地オオバタが外輪山上に位置し, 17〈東〉では「大はたの山のもとも」と記載されている点から判断して, 谷が始まる地点の頂上部(端辺)に祀られた山の神が, 「谷」の位置指標として用いられた事例であるとみておきたい。

(44)——現在, 山の神の信仰をもっともよく伝えている湯浦地区小無田組では, 毎月16日に山の神祭を行うが, この日は, 山の神が「木の種を蒔く日」とか, 「木の数を調べる日」, 「狐をする日」といわれ, 山仕事は休

みになるという。春田ほか, 註(19)論文, 197頁参照。なお, 17〈東〉の里境にみえる「しくれとの山の神」については, 雨乞い行事との関連が考えられよう。現在, 湯浦地区では2か所にシグレサンと呼ばれる大きな石が祀られているが, いずれも水神の化身とされ, 干天時にはその前で雨乞い行事をするので, 別名「水もらい石」とも呼ばれている(註(34)書, 95頁)。「しくれとの山の神」の性格もこれと類似するか。

(45)——春田ほか, 註(19)論文, 210頁。なお, 男蜂宮に関する地元での伝承については, 高本隆綱『阿蘇湯浦平成風土記』(2002年), 178頁~182頁に詳述されている。

(46)——『日本国語大辞典 第二版』第10巻(小学館, 2001年), 【長葉藪真麻】参照。

(47)——『日本国語大辞典 第二版』第12巻(小学館, 2001年), 【真麻・苧麻・真苧】参照。

(48)——永原慶二『新・木綿以前のこと』(中公文庫, 1990年), 参照。

(49)——湯浦地区の話者によると, 山の水田は谷水を得る形づくり, 戦後の拡大造林以前は琴川と紅池川の上流に分布していた。また, 麻畠も紅池川付近の肥沃な土地に点在していた。

(50)——西湯浦地区の松本久志氏(1920年生まれ)によると, 同地区のタケント坂(宝暦3年「内牧手永絵図」では「竹ノ戸」を通る坂)沿いの内壁上部に真っ白いカンカンした(堅い)2~3間の大きさの石があり, シロイシと呼ぶという(2004年5月17日の聞き取り)。

(51)——『日本国語大辞典 第二版』第10巻(小学館, 2001年), 【榎・柞・枹】参照。

(52)——註(30)書, 89頁。

(53)——春田ほか, 註(19)論文, 214頁。なお, 応永28年8月日, 神事祭料所役等掟書(「阿蘇家文書」240号)によれば, 室町時代に鞍形尾には城があり, 番衆が交替で詰めていたことがわかる。

(54)——k. 谷の項で, 「藪」などの土地利用を示す形容語は, 一例を除き「尾」ではみられないと述べたが, その一例がこれにあたる。本事例の「ふたまやふ」は「尾」の地形全体を形容しているのではなく, 谷川が合流する地点の景観を示すという観点に立てば, むしろ「谷」の末端部の土地利用とみなすこともできよう。

(55)——折戸地区の話者による。

(56)——註(33)書, 図I-2-4参照。

(57)——湯浦地区の話者によると, 南宮原からスズヤマを越えて小倉へと向かう道があり, この道はオクラゴシ

またはスズヤマゴシと呼ばれていた。

(58)——註(23)史料。

(59)——鎌田磨人氏は、宮崎県椎葉村での聞き取り調査をもとに、焼畑耕作者が焼畑に用いる土地の状態をさまざまな環境要素を用いながら総合的に判断し、作物の品種を選んだり、耕作方法を決定するプロセスを明らかにしている(鎌田「山間農村における山地利用と景観の構造」, 沼田眞編『景相生態学—ランドスケープ・エコロジー入門—』, 朝倉書店, 1996年, 所収)。

(60)——『1:30,000火山土地条件図 阿蘇山』(国土地理院, 1992年調査・編集, 1994年発行)による。

(61)——阿蘇品保夫氏は、水吐合に屋敷が立地し、吐合の水が村々にとっては確保すべき重要な灌漑用水であったと推測している(阿蘇品, 註(15)①論文, 48頁)。なお、「吐合」地名の熊本県における分布については、規工川宏輔「熊本県における自然地名の分布について」(『熊本大学教育学部紀要』44, 1995年)が詳しい。

(62)——『日本国語大辞典 第二版』第7巻(小学館, 2001年), 【石菖】参照。

(63)——春田ほか, 註(19)論文, 198頁。

(64)——『日本国語大辞典 第二版』第10巻(小学館, 2001年), 【合欵木】参照。

(65)——西小園地区の話者による。

(66)——富岡儀八, 註(37)書, 51頁参照。

(67)——年月日未詳, 阿蘇社年中神事次第写(「阿蘇文書写」, 『大日本古文書』家わけ13-2)。田作祭りについては, 村崎真智子『阿蘇神社祭祀の研究』(法政大学出版局, 1993年)を参照。

(68)——阿蘇品, 註(15)①論文, 50頁。

(69)——註(23)史料。

(70)——阿蘇品, 註(15)⑤論文, 参照。

(71)——応永9年卯月日, 阿蘇社造営料木郷村支配注文(「阿蘇家文書」216号), 天文23年8月7日, 阿蘇社造営料木郷々支配注文(「阿蘇家文書」319号), ほか。

(72)——上野智子『地名語彙の開く世界』(和泉書院, 2004年), V1「命名視点と命名心理」参照。

[補註] 熊本県阿蘇郡阿蘇町は町村合併により, 2005年2月11日に阿蘇市に移行したが, 論文中では調査・執筆時点での町名で表記している。

(熊本大学教育学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2004年9月16日受理, 2005年1月15日審査終了)

An Analysis of Environmental Vocabulary in Place Names Recorded in the Middle Ages: Based on the “Sanyasakai Chumon” of Yunoura Village, Aso-gun, Higo Province

HARUTA Naoki

Up until now, place names recorded in historical documents have mainly been used as important aids for reconstructing historical landscapes. As a result, while attention has gathered on historical place names that are keys to this reconstruction, it must be said that there has been little use of place names whose localities are difficult to identify. However, place names should not be seen merely as symbols denoting locations, but should be seen as verbalization of knowledge of the land. If we attempt an analysis of the elements of the meanings of place names from this perspective, we will most probably be able to make effective use of a greater number of recorded place names. In particular, we can regard place names related to the natural environment as expressions of a thorough knowledge of the environment by the inhabitants. Analysis of knowledge of the environment using place names as aids has already been done using names for local neighborhoods and popular names that are an intimate part of the everyday lives of inhabitants. However, even with recorded names, if we are able to use groups of names that have been put together regionally and quantitatively an analysis of the vocabulary of place names should prove helpful in gleaning information on knowledge about the environment and use of the environment among inhabitants at a specific time in history.

In this paper, I conduct a vocabulary analysis of recorded place names using the “Sanyasakai Chumon” from Yunoura village, Aso-gun, in Higo Province as primary material. This record of names contains many place names with natural elements and it is also easy to understand the mutual association between the place names it records. I examine what sort of knowledge the people of the middle ages – the subject – had of the environment – the object – and how they constructed their living spaces. My study has yielded the following three main findings. First, the living space for Yunoura village during the middle ages was bounded by a road called the “Oomichi”, (lit. main road) which vertically connected the outer ring of the Mt. Aso crater with settlements on the foothills, spanning an altitude of 400 meters, and a horizontal road called the “Yokomichi” (lit. horizontal road) that connected the two. Second, living in a topographical environment in which there were repeated avalanches of rocks, vol-

canic ash and mud as well as flooding, the inhabitants of Yunoura village had systematic knowledge of flash points at times of natural disaster and were selective when locating settlements and in their use of the land. Third, for place names with natural elements there is a huge gap between the middle ages and today. To explain this, in addition to the effects of external environmental changes, it is also necessary to take into account internal changes in the people possessing knowledge of the environment and the institutional and social frameworks that regulate place names.